なぞの転校生

Mysterious transfer student

Taku Mayumura

眉村 卓

眉村 卓（まゆむら・たく）
1934年大阪市生まれ。大阪大学経済学部卒業後、耐火煉瓦会社勤務の傍らSF同人誌『宇宙塵』に参加。1961年、「下級アイデアマン」が『SFマガジン』のコンテストに佳作入選し、コピーライターを経て1965年より専業作家となる。1979年『消滅の光輪』で第7回泉鏡花文学賞と第10回星雲賞を受賞。1987年『夕焼けの回転木馬』で第7回日本文芸大賞受賞。1996年『引き潮のとき』で第27回星雲賞受賞。『ねらわれた学園』『なぞの転校生』など、1970年代に発表されたジュブナイルSFは10代の読者を中心に絶大な人気を博し、何度も映像化されてきた。近著に『僕と妻の1778話』『沈みゆく人』『しょーもない、コキ』など。2012年6月より、出版芸術社から「眉村卓コレクション」の刊行が開始された。

カバー写真 Getty Images
カバーデザイン 大岡喜直（next door design）

ま3-9

なぞの転校生

Mysterious transfer student
Taku Mayumura

眉村 卓

講談社文庫

眉村 卓
ま 3 9
なぞの転校生
講談社文庫
Y430

9784062777544
1920193004304
ISBN978-4-06-277754-4
C0193 ¥430E (0)

なぞの転校生
眉村 卓
定価：本体430円（税別）

ま 3 9

岩田広一（いわたこういち）が通う中学に山沢典夫（やまざわのりお）という転校生が入ってきた。典夫はギリシャ彫刻を思わせる美男子なのに加え、成績優秀でスポーツも万能だが、なぞめいた雰囲気を持っていた。ある日とんでもない事件を起こした典夫の秘密とは？ '70年代にドラマ化され人気を博したSFジュブナイルの傑作。　解説・岩井俊二

講談社文庫
眉村卓作品
ねらわれた学園
なぞの転校生

小説と読物と文庫情報月刊誌

IN★POCKET 直接定期購読のご案内

❶購読期間：1年間（12冊）
❷お申し込み方法：（フリーコール）0120-29-9625まで。受付 9:00～18:00。年末年始を除き年中無休。インターネットからもお申し込みになれます。
http://www.bookclub.kodansha.co.jp/teiki/6.html
❸お支払い方法：①クレジットカード ②コンビニ端末からの振り込み ③郵便払込票をお届けして、コンビニまたは郵便局でお支払いいただく方法。以上の中からお選びいただけます。詳しくはお申し込み時にご確認ください。
（購読料金は前払いにて定価×12冊です。送料は小社が負担します）

話題の新刊、面白情報満載！講談社文庫の情報サイト
http://www.bookclub.kodansha.co.jp/bunko/

不朽のSF小説!!

講談社文庫
Y430

「わたしたちの未来は真っ暗のように思えることがあるのも、
ほんとうのことです。でもね、みんなそれでもがんばっている。
なんとかして自分たちの手でよい未来を創ろうとして生きている」

テレビ東京系列で**連続ドラマ**放送決定

『ドラマ24 なぞの転校生』

2014年1月10日スタート 毎週金曜 深夜0:12
（テレビ大阪は1月13日スタート 毎週月曜夜11:58）

主演：**中村 蒼、本郷奏多、桜井美南**

企画プロデュース・脚本：**岩井俊二**

なぞの転校生
277754-4

なぞの転校生

眉村 卓

講談社文庫

あけまして
おめでとう
ございます

甲午元旦

眉村卓

〒五四五-〇〇二二 大阪市阿倍野区播磨町一-四-一五

郵便はがき

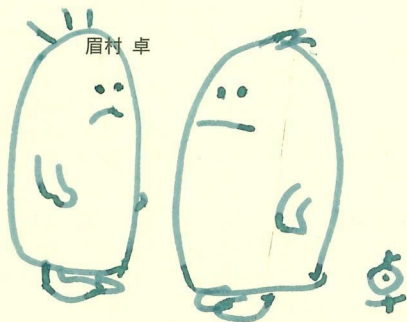
NIPPON 日本郵便

インクジェット紙

このはがきは一部古紙を使用しているため、黒点等が見える場合があります。

抽せん日1月19日／お年玉のお渡し期間1月20日～7月22日／くじ番号を切り取らずに郵便局へお持ちください。

B1071組

963200

謹呈
講談社文庫
なぞの転校生
眉村 卓
卓
眉村卓
講談社

なぞの転校生　目次

なぞの転校生

異様な少年

よく晴れた日曜日だった。
朝食が終わると、広一(こういち)はすぐバットとグラブを出して、でかける用意をはじめた。
「あら、どこへ行くの？」
母がたずねる。
「クラス対抗の試合なんだ」
広一はちらっと時計を見ながら答えた。
「早く行かなくちゃ」
「勉強したの？」
「広一が自分で責任を持つさ」
奥の部屋で新聞を折り返しながら父がそういった。
「こんな団地住まいじゃ、せいぜい運動でもしないと体がなまってしまうからな」
「行ってきます」

広一は鉄のドアをバタンと鳴らして廊下へ出た。廊下といっても、ここは戸数の多いマンモス団地で、左右にずっと通路がのび、ドアがいくつも並んでいる。

広一はエレベーターに乗ろうとして歩きだしながら、なにげなく隣室のドアを見た。

名札がかかっている！

ついきのうまで、ここは空室だったのに、いつのまに引っ越してきたんだろう。

彼は足音をしのばせて、その六四〇号室に近づいた。わずかに開かれた窓の奥には、いつ運び入れたのか、ソファーや冷蔵庫などがきちんと並んでいる。そればかりか、人の話し声までしているのだ。

おかしいな……広一は首をひねった。これだけの道具を持ちこむとすれば、一時間や二時間ではすむはずがない。とすれば、ゆうべのうちか、きょうの夜明けにでも引っ越してきたのかな……。

しかし、あまり長くは考えていられなかった。軽い足音がドアの内側へ近づいてきたからである。

つぎの瞬間、六四〇号室のドアがあいた。

出てきたのは、広一と同じ年ごろの少年である。が、それはどう見ても、ただの日本人ではなかった。髪も、ひとみも黒かったが、整った顔だちといい、ひきしまった筋肉といい、まるでギリシャ彫刻を思わせるような美少年だったのである。

「何か……用ですか？」

少年は、いった。

「いや……なんでもないんです」

広一はわれに返ると、頭をひとつさげてエレベーターの前へ行った。

ところが、少年のほうも何か用事でもあるのだろう。広一と同じエレベーターに乗りこんできたのである。

なんだかへんな具合だった。のぞき見をしていた家の人とふたりきりで、同じエレベーターに乗っているのだから無理もない。ふたりは、だまりこくったまま、体をエレベーターの降下の感覚にまかせていた。

突然、ガタンと音がした。同時にエレベーターの中は真っ暗になったのだ。

停電らしい。

広一は舌打ちした。急いでいるというのに不運なことだ。こうなればとにかく外へ

出て、階段を降りるほかはない。
　非常連絡のボタンを手でさぐっていた広一は、しかしぎょっとして振り返った。パッと閃光（せんこう）がひらめいたからである。
　それは少年のポケットライトらしかった。その光がしだいに収束し、小さな円光になると、少年はライトをドアに向けた。
　たちまち塗料の焦（こ）げるにおいがした。つづいてドアが赤くなり、ゆっくりととけはじめたのである。
「きみ！」
　広一はおどろいて少年を制止した。
「そのへんなの、何か知らないけど、ドアに穴をあけることなんかないよ！」
「ほっといてくれ！」
　少年はあえぎながら、そのレーザーにも似た光の焦点をジリ、ジリと移動させている。
「やめろ！」
　広一がどなったとき、パッとエレベーターの照明がともった。それとともに、ふた

たびふたりの体はゆっくり降下しはじめていた。ほんのわずかなあいだの停電だったのだ。
　広一はドアに目を近づけた。十センチ平方ぐらいにわたって塗料がはげ、小さな穴があいている。
「なんということをするんだい」
　少年に目を転じた彼は、思わず口をつぐんだ。
　少年の目は、異様に大きく開かれている。その顔は何者に対してか、憎悪にみにくくゆがんでいた。
　広一の背をぞっとしたものが通りぬけていった。
　この少年は何者だろう……これほど恵まれた体と顔を持っていながら、エレベーターの中でほんのわずかのあいだとじこめられただけで、あんなぶっそうなものを持ち出す——だいいち、あんな小さなもので金属をとかせるような道具など、広一はいままで聞いたことも見たこともなかった。
　ドアがあいた。一階についたのだ。壁に背中をくっつけて、まだ息をはずませている少年をそのままに、広一はバットとグラブを持つと外へとび出した。これ以上、へ

んな少年になどかまってはいられなかった。
だが、広一とその少年の関係は、それだけではすまなかったのである。
そのことは翌日の月曜日になってわかった。

転校生

みんな思い思いにノートをくったり、教科書を読んだりしている。
一時間目が始まって十分も過ぎたというのに、まだ先生はやってこなかった。
「大谷先生、おそいわね」
隣席の香川みどりが広一にささやく。
「何かあったのかしら」
そのとき、教室に先生がはいってきた。いや、先生だけではない。ひとりの生徒がそのうしろについていたのだ。
広一は呆然として教壇を見つめた。その少年こそだれあろう、あのきのうの妙な隣人だったのである。

クラスがちょっとざわめいた。少年の美貌にいささかおどろいたのである。
「岩田くん、何をしているの？」
大谷先生が鋭い声でいい、広一ははっと気がついた。彼はクラス委員である。
「起立！」
広一は叫んだ。
「礼！」
二年三組の全員は、がやがやと席についた。
「きょうはこのクラスにひとり、新しいお友だちを紹介します」
先生は少年を教壇に立たせた。
「山沢典夫くん……東京から転校してきました。大阪は初めてだそうですから、みんな仲よくやってください」
それから少年の肩に手をかけた。
「さあ山沢くん、自己紹介をしなさい」
「山沢典夫です」
少年はちょっと微笑すると、静かに話しはじめた。きのうとは、似ても似つかぬ態

度だった。

「趣味はべつにありません。得意学科というものもありません。それから乱暴な人はきらいです。ぼくはこの世界——いや、この大阪で、できるだけみんなと仲よくやっていきたいと思っています……」

「へえ！　美少年！」

香川みどりはいいながら、広一の表情に気がついたのだろう、妙な顔をした。

「あら、どうしたの？」

「い、いや、なんでもないんだ。ちょっとね」

広一はうやむやに返事をした。

そのときだ。

話している典夫の視線が、広一に落ちた。

広一は典夫を見返し、典夫のほおがけいれんした。

ちょっとのあいだ、妙な沈黙があった。

「じゃ、席につきなさい」

大谷先生がいった。

「すっかり時間をとってしまったけど、これから授業を始めます」

大谷先生の理科の授業が始まると、みんなはもう典夫のことなど忘れたように、必死でノートをとりはじめた。この阿南中学校というのは、大阪でも、有名公立高への進学率がいいので有名だ。それだけに、ぼんやりしていると、たちまち成績が落ちるので、うかうかしてはいられないのだった。

先生は、黒板に字や絵を書きなぐりながらどんどん授業を進めていった。話のあいだにもつぎからつぎへと生徒に質問を浴びせる。答えられないと、そのうしろ、またそのうしろというふうに、一刻もゆだんができないように教えるのが、大谷先生のやり方だった。

広一はノートをとりながら、ちらっと前のほうにすわった典夫を見た。そしてぎょっとした。

典夫はノートをとっていない。いや、それどころか教科書さえとじたままなのだ。腕を組んで先生の話をじっと聞いているだけなのである。

「岩田くん！」

声がとんできた。

「太陽っていうのはどんな星でした？」

不意をつかれた広一は、立ちあがったまま一瞬先生の顔を見つめて、ポカンとしていた。

大谷先生は首をかしげた。広一がこんなふうになるのはめずらしかったからだ。先生は視線をめぐらせて、こんどは山沢典夫をゆびさした。

「はい、山沢くん」

典夫がすっと立った。

「太陽ですか？」

「わからない？」

「いいえ」

「じゃ、いいなさい」

「太陽は」

典夫は無表情に、まるで暗唱でもしているような口調で答えた。

「直径、地球の約百九倍、恒星(こうせい)としてはG型に属する中型の星で、第一種族のメンバーです。銀河系の辺縁部に位置し、その回転とともに一秒間約……」

「もうよろしい」

先生は腕をだらりとさげたまま、へんな顔をした。

「わたしは、そんなにたくさんいわなかったけど……」

典夫は微笑して答えなかった。先生は胸をそらすと、こんどはきびしい顔になった。

「でも、教科書ぐらいは開いておきなさい。それに、ノートは持っていないの？」

典夫はひとつうなずくと、バッグから大きなノートを取り出した。

「持っています」

「それならけっこう」

先生はふたたび黒板にむかった。

なんということだ……と広一は思った。まるで、先生の授業内容ぐらい初めから知っているような口ぶりではないか。

それに……たしかさっきのあいさつで、あの山沢典夫は、大阪というかわりに〝世界〟などといいまちがえた。

考えれば考えるほど、おかしな話だ。

「岩田くん！」
香川みどりがそっと注意した。
「何をぼんやりしているの」
広一は肩をすくめると、また先生のほうへ顔を向けた。

みどり完敗

四時間目が終わると、みんな昼食もそこそこに、運動場へ走っていった。
「岩田くん、卓球しない？」
みどりがさそった。
「きょうはカタキをとってあげる」
「卓球かあ」
もちろん、広一も卓球は好きだ。が、相手がみどりでは……。
「岩田くん、うわさを気にしているのね？」
みどりはあけすけにいった。

「わたしとあなたのこと、みんながなんだかんだといっているのは知っているわよ。でも、そんなこといちいち気にしていては、どうにもならないじゃないの」
それもそうだ。へんな気をつかうと、かえって妙なことをいわれる。そのくらいのことは広一もよく知っていた。もっと気をらくに持ったほうがいいのだ。
「よし！」
彼は叫んだ。
「やろう」
「ついでに、山沢さんもさそってあげましょうよ」
みどりは教室の外に目をやった。
山沢典夫は、校庭のすみにすわりこんで、じっと雑草を見つめていたのだ。
「山沢さーん」
みどりは叫んだ。
「卓球しない？」
典夫はしばらくその雑草をなでてから、ゆっくり顔をあげた。いったい何を考えていたのか、神経質そうな表情をほころばせると首をかしげた。

「卓球？」
「できるんでしょ？」
「さあ……でも、見ていれば、できると思う」
「たよりないのね」
みどりは笑った。
「でもいいわ。とにかくいらっしゃいよ」
三人が卓球台のそばへ行くと、すでに打ち合いをはじめていたクラスメートたちが、残念そうな顔をした。
「岩田と香川だぜ」
「残念……これじゃまた台を取られっぱなしだぞ」
「くやしかったら上手になりなさいよ」
みどりは、順番待ちの席につくと、そうひやかした。
はじめにみどりの番がまわってきた。なんといっても学校代表選手だ。またたくうちにそれまで勝っていたクラスメートを負かすと、ほがらかにいいはなった。
「さあ岩田くん……きょうは負けないわよ」

広一はラケットをにぎった。
速いサーブが飛んできた。カットして打ち返すと、こんどはスマッシュ……しかし、それはネットにひっかかった。
「やったわね」
ゲームは一進一退だった。片方がポイントを取ると、たちまちもう一方が取り返す。
しかし、そのうちに練習量の差だろう、じりじりとみどりのほうがリードしてきた。広一はやっとのことでジュースに持ちこんだものの、たてつづけに鋭い打ちこみを二本やられて敗退した。
「やっぱりだめか」
ラケットを振りながら広一は笑った。
「つぎはだれ？」
すっと典夫が近寄ってきた。
「ぼくらしいよ」
「へんなにぎり方をしているんだな」

広一は典夫の手を見ていった。
「それ、どういうんだ？」
「これでいいんだ」
シェークハンドともペンホルダーともつかない持ち方をした典夫は、卓球台の前に立った。
「だいじょうぶ？」
みどりがいう。
典夫はうなずいた。
めんどうだと思ったのだろう。みどりは得意のサーブをあざやかにはなった。
つぎの瞬間、台のまわりにいた連中がどっと歓声をあげた。広一も自分の目が信じられなかった。典夫の打ち返した球は、それほど速かったのである。しかもコーナーぎりぎりにバウンドすると、みどりが体を立てなおすまえに床に落ちていたのだ。
「……すごい！」
と、みどりは目をまるくした。
「よし、もう負けないわよ」

しかし、結果はそううまくはいかなかった。典夫は、右に左に、電光のようにとびまわりながら、激しく球を打った。六—〇、七—〇、八—〇……さすがのみどりも、ぜんぜん歯が立たなかったのである。
「あなた、まえ、選手だったのね？」
完敗したみどりは、荒い息をつきながらそうたずねた。
典夫は静かに含み笑いをした。
「いや……初めてです」
「初めて？」
「卓球というものを」
典夫ははずかしそうにそう答えた。
「ぼくはきょう、初めてやったんです」
だれも口をきかなかった。みんながしんとなって典夫を見つめているばかりだった。

もうじき雨になる

それから十日ほどたった、ある日のことだ。
いまでは典夫は、すっかりクラスの人気者になっていた。ノートひとつとらずに、どんな質問を受けてもらくらくと答える。おまけにスポーツは万能ときているうえに、だれもがはっとするくらいの美少年ときては、人気の出ないのがおかしいくらいだ。
おかげで、それまでクラスをリードしてきた広一の影はすっかりうすくなってしまった。まあそれはしかたがないとしても、そうした典夫があいかわらずみんなと心から仲よくせず、ともすれば自分で仲間はずれになるのだけは、どう考えてもおかしい。だれかが話しかけたりさそったりすれば、仲間にはなるものの、自分から進んで何かをやろうとは決してしなかったのである。
秋の運動会が近づいたその日、広一はその打ち合わせのために、授業が終わったあとで三十分ほど残るようにみんなにいった。

「みんな、残ってくれるね？」
広一がクラスを見まわすと、ひとりだけ手をあげた者があった。
「ぼく、だめなんだ」
それは典夫だった。
「用事があるのかい？」
「そういうわけじゃないけど」
「じゃ、残ってもいいじゃないか」
「でも……困るんだ」
ふたりのやりとりはしだいに険悪になってきた。
おとなげないとは思いながらも広一は、ついふだんの腹だちを典夫に向ける結果になった。
「みんなが協力するといっているんだぜ」
広一は大きな声を出した。
「理由をはっきりさせてくれたらそれでいい……塾へ行くとか、留守番があるとか……でも、なんの用もないのにひとりだけ帰るなんて、どうかと思うな」

「いいじゃないの。クラス委員だからって、そこまで干渉することはないわ」
めがねをかけた平野(ひらの)という女生徒が叫んだ。
「そうだそうだ。委員横暴」
「個人主義でいこうじゃないか」
「みんな、ちょっと待って！」
立ちあがったのはみどりだった。
「岩田くんも山沢くんもそれぞれ立場があると思うけど、そんなことをいっている間に打ち合わせしたらどう？」
こんどは全員が賛成した。
「いいだろう」
と、広一。
「ぼく、困るんだ……」
典夫は窓の外を見ながら泣きそうな声を出した。
「もうじき雨になる……ぼくはかさを持ってきていないんだ」
「じょうだんじゃないぞ！」

とうとう頭にきた広一はどなりつけた。
「学校から団地まで、走れば三分もかからないじゃないか。雨ぐらい、なんだよ！」
ふたたび重苦しい空気がみなぎっていた。みんなは、だまってふたりの争いを聞いていた。
「あら、ほんとうに降ってきたわ」
みどりが叫んだ。
「ワァ、すごい夕立！」
典夫は体をふるわせながら、窓の外にしぶく雨を見つめていた。
そして細い声を出した。
「あの雨の中には原水爆実験による放射能が含まれている……ぼくは、それがこわいんだ……致命的なんだ……」
広一はぽかんとして、そうした典夫のさまを見つめていた。雨の中に含まれている放射能が致命的……いったいこれはどういうことなんだ……。
「あまりオーバーなこと、いうなよ」
広一はあきれて叫んだ。

「違う、違う、違う！」
典夫は絶叫した。
「ほんとうだ。ほんとうなんだったら！」

軽蔑の視線

運動会の打ち合わせが終わったころには、もう夕方になっていた。いいあんばいに、雨もやんでいる。
「よかったわね」
みどりが山沢典夫に、笑顔を向けた。
「あのまま帰っていたら、きっと夕立にぬれていたわよ」
「しかし、おどろいたなあ」
ひとりがだれにいうともなく感想をもらした。
「雨の中に含まれた放射能がそんなにこわいかなあ」
「やめろ！」

広一はどなった。典夫のただならぬ表情に気がついたからだ。
典夫はじっと、いま悪口をいったクラスメートを見つめていた。顔色を変え、身をふるわせながら、にくしみをたたえた目を向けていたのである。
（――あのときと同じだ）
広一はぞっとしながら考えた。あの初めて会った日に、エレベーターの中で見せたおそろしい顔と同じだった。
無気味な沈黙が流れた。みんなは、典夫に視線をくぎづけにされて、動くことさえできなかった。
しかし、数秒後、その緊張は破れた。
ふいに、典夫が姿勢をくずして、
「みんな……なんてばかなんだ」
といったからである。
「ばかですって？」
「そうだとも」
典夫はゆっくりいいはじめた。

「な、この世界でいちばんこわいのはなんだ？　それは科学の行きすぎによる人類の自滅じゃないか……みんな、気にしていないらしいが、雨の中の放射能だって、どれだけおそろしいものか……それを考えたことはないのか」
「どうも、よくわからないな」
広一が反撃に転じた。
「わからない？」
「そうさ」
典夫の軽蔑に満ちた顔を見ながら、広一はつづけた。
「きみは、科学の行きすぎによる悪影響として原水爆や放射能雨をにくんでいるんだろうが」
「あたりまえだ！」
「まあ聞けよ。なるほどぼくたちは文明の行きすぎによるいろんな被害を受けてはいるだろう……しかし、そのかわりにジェット機やモノレールに乗り、電化製品を使っているんだぜ……もちろんひどい行きすぎはよくないだろう……でも、ある程度までは辛抱しなくちゃしかたがないんだぜ」

典夫のほおがけいれんした。
「きみには……」
典夫は、歯ぎしりした。
「きみには思考能力というものが欠如しているんだ」
「思考能力、欠如だと？」
「そうだ。こんな、電化製品や、文明の利器なんて……ないほうがよっぽどいいんだ。きみたちは鈍感だから何も感じないんだろう。われわれにとってみれば、文明世界より原始世界のほうがよっぽどましなんだ」
「なまいきな！」
広一は思わず典夫の胸ぐらをつかむと、ほおをなぐった。
「きみは電気や水道や新聞がなくてもいいのか、それで暮らしていけるのか！　だいいち、このまえきみがエレベーターの中で使おうとした妙な道具だって、文明の……」
しかし、それは終わりまでつづかなかった。典夫はふいに身をひるがえすと、もう暗くなった校門へ走り出ていったのである。

「野蛮だわ！　岩田くん」
みどりが叫んだ。
「違う。ぼくは、あいつの……」
「知らないぞ」
クラスメートがいう。
「山沢はもう学校へ出てこないかもしれないぞ」
広一は肩で息をつきながら、いま典夫の出ていったほうを見つめていた。なんだか頭がぐらぐらして、気分が悪かった。

六四〇号室の客

クラスメートの予言どおり、それから三日たっても山沢典夫は登校してこなかった。
「岩田くん」
ある日授業のまえに大谷先生が声をかけた。

「あなた、山沢くんの隣室だったわね」
「はい」
「山沢くん、どうしているの？」
「よく知りません」
「あなた、山沢くんをなぐりつけたそうじゃないの」
「…………」
「もうすぐ中間テストよ。それから運動会じゃないの。このままほうっておくつもり？」
「しかし、ぼくは」
「おだまりなさい！」
大谷先生はぴしゃりといった。
「みんなにきくけど、山沢くんをこのままにしておいてもよいかしら」
香川みどりが立った。
「岩田くんは卑怯（ひきょう）だと思います。暴力をふるったんですから、山沢さんに対してひとことぐらいちゃんと謝罪すべきです。クラス委員で、家が隣だったら、もうちょっと

考えるべきです」
　腰をおろしながら、みどりは広一にいった。
「岩田くんって、もっと男らしいと思っていたわ」
　クラスが、がやがやとざわめいた。
「先生はきょう、山沢くんの家へ行きます」
　大谷先生は宣言した。
「そのとき、岩田くんにもついていってもらうつもりです。どう？」
「賛成！」
「責任をとれよ」
　そんな声が乱れとんだ。広一はぎゅっと奥歯をかみしめながら聞いていた。
「わたしも、ついていきます！」
　叫んだのはみどりだ。みんなはたちまち毒気を抜かれてしんとなった。
「その必要はないんじゃない？」
　先生がやわらかくいったので、みどりの顔はみるみる赤くなった。
「教科書を開いて」

　大谷先生は教室を見渡すと、そういった。
　授業が終わると、広一は大谷先生といっしょに団地へむかった。
　どう考えても気が進まない。彼は山沢典夫という少年が徹底的にきらいだった。
　なぜかはわからない。ひょっとすると嫉妬(しっと)だろうかと思う……が、それだけではなさそうだ。何か生理的に、嫌悪感が先にたってしまうのである。山沢典夫には、ほかのクラスメートとは根本的に違う何かがあったのだ。スタイルもよく、美しい顔だちでスポーツも学業も――事実、このまえのテストでは広一は典夫に抜かれて二番になってしまった――だんぜん群を抜いているのに……広一は自分が情けなかった。
　エレベーターを降り、自分の家にバッグをおくと、広一は先生と並んで六四〇号室の前に立った。室内には客でもあるのか、おおぜいの声がしている。
　突然、そのドアが開くと、中から二十人ほどの人々が現れた。子ども連れも多かった。それがほとんどいっせいに出てきたのである。
　かれらは山沢家の人々とあいさつを交わすと、エレベーターのほうへむかっていった。だが、それがただの人々でないことは、広一にもすぐわかった。なぜなら、いま

出てきた人々は山沢一家がそうであるように、いずれもギリシャ彫刻に似て整った、いや、整いすぎた顔だちをしていたのである。
　ふたりが呆然と立っているそばを、その奇妙な一群は通りすぎていった。なかにひとりかふたり、ちらりと視線を向けた者もあったが、しかしそれはおそろしく冷ややかなものだった。まるで敵意でも持っているような印象さえ受けたのだ。
「あ、山沢くん！」
　広一よりも一瞬早くわれに返った大谷先生は、いまとじようとする六四〇号室のドアに叫ぶ。
　一度とざされたドアが、ふたたび細めにあくと、そこから典夫の顔がのぞいた。
「山沢くん、ちょっと話が……」
「帰ってください！」
　典夫は濃いまゆをぐっと寄せると、そういいはなった。
「ぼくたち、先生や、そこの岩田くんに用事はありません」
「しかし……」
「あすから登校します。うそはつきません。いま、みんなで相談して決めたところです」

　同時に、ドアは激しく鳴った。
　先生と広一はあっけにとられて、しばらくその場に立ちつくしていた。
「どうしたのかしら」
「それよりも……」
　広一の心には、何かしら説明のできない不安の影がかかりはじめていた。
「いま、山沢くんは、みんな、といいました。みんなって、だれのことでしょう」
「そういえば、おかしいわね」
　先生は肩をすくめた。
「ねえ、先生」
　広一は、真剣な口調（くちょう）でいった。
「山沢くんはひょっとすると……」
「え？」
「どこか別の世界からきたんじゃないでしょうか」
　大谷先生は笑いだした。

「まさか。たしかに山沢くんは変わっているけど……まさかねえ」
広一はだまった。思いつくままをしゃべることは、かえって広一自身の信用をなくすことになりそうなのに気づいたからである。

典夫のデザイン

中間テストが終わって一週間ほどたつと、運動会がやってくる。
クラス対抗意識の強いこの阿南中学校では、運動会ともなると各クラスごとにアーチを用意し、応援の練習をするのが毎年の例であった。二年三組もやはり同じようにいっしょうけんめいに準備したかいがあって、みごとなアーチを作りあげることができた。
当日の朝、広一たちはアーチを校庭に組みあげながら、他のクラスのものをながめた。
「どうやら、うちがトップだな」
みんなは、いった。

「山沢さんのデザインって、すばらしいわ」
だれかがいう。典夫ははずかしそうに頭をかいた。
「あっ、あれは……」
突然みどりが奇声をあげた。見ると校庭のすみに、一年五組のアーチが立てられようとしている。咲き乱れた花を散らした木をかたどったデザイン……それは、二年三組のものとあまりにもよく似ていた。
「あそこにもあるぞ！」
またひとりが叫んだ。
「三年二組のも同じだ！」
一同は呆然として校庭を見つめていた。こまかい部分こそ違っていたが、発想はまるで同じだった。
「これ、どういうこと？」
ひとりが叫んだ。
「まるで、申し合わせたみたいだわ」
「山沢！」

広一はどなった。
「説明してくれ……これは、なぜだ」
「偶然だ」
典夫も放心したように、ほかのアーチをながめていた。
「こんな……こんなことがあろうとは……」
「真似（まね）をしたのか？」
広一は詰め寄った。
「正直にいってくれ。きみは……いや、だれかがきみのアイデアを……」
「違う」
典夫は首を振った。
「偶然だ。偶然こうなったんだ」
「ばかをいうな！」
「岩田くん！」
みどりがさえぎった。
「山沢さんに失礼じゃないの」

「しかし」
「しかしも何もないわ」
みどりはカンカンになっていった。
「このアイデアはきのう、山沢さんが思いついたのよ。そして、山沢さんがみんなの前でかいたんじゃないの。よそのが似ていてもそれは偶然だわ」
「そうだ」
「しかたがないことだ」
クラスの連中は、みどりを支持した。
広一は唇（くちびる）をかんだ。たしかにみどりのいうとおり、真似をしたり、されたりするひまはなかったはずだ。
「悪かった」
「ひとを疑うなんて、岩田くん、あなたこのごろすこしへんよ」
みどりはしゃべりまくると、こんどは手を高くあげた。
「さあ、そろそろ入場式よ！　みんな、行きましょう」
典夫とみどりを先頭に、クラスは動きだした。

た。広一は黙々としたがった。いまやクラスの主導権は、完全に彼の手をはなれてい

妙な仲間たち

競技が始まると、校庭は歓呼の声につつまれた。学年別、クラス別の得点表がかかげられ、生徒たちは一心不乱になって自分の出場種目にベストをつくした。
なかでも典夫の活躍は、予想されたとおり抜群だった。団体競技ではときどきチームワークを乱してしまったりしたが、個人種目となると陸上部員でも足もとにも及ばなかったのである。
時間の経過とともに、一部のクラスが他を引きはなしはじめた。むろん二年ではいまのところ三組がトップである。
「おい、広一」
肩をたたかれた広一は、競技から目をそらすと振り向いた。
「ひどく好調じゃないか」

いつのまにきていたのか、そこには父と母が立っていた。
「どうやら二年では、おまえのクラスが優勝だな」
いいながら、父は広一を校庭のすみに連れてくると、急に声をひそめた。
「ことしのアーチ、ありゃいったいなんだ?」
「なんだか知らないけど……」
広一は首を振る。
「どうやら、偶然に同じものができちゃったんだよ」
「よく似てるわ」
母が目を校庭へうつした。
「一年生にふたつ、二年にひとつ、三年にふたつ……」
「それに、あのアーチのあるクラスは、いずれもだんぜんリードしている。妙だな」
父はさりげなくいった。
広一は胸をつかれたような心地がした。
そういえば、そのとおりだった。
似たアーチを立てたクラスは、他を引きはなして得点を重ねている。それも、団体

競技ではそれほどではないが、個人種目では比較にならない好成績だ。
「あまりふしぎだから、わたしはさっき先生にきいたんだ」
父はうなずいてみせた。
「すると、そうしたクラスには、すばらしくよくできる生徒がいるという。しかも、それがいずれも転校生だそうだ」
「なんだって?」
「そういえば、お隣の典夫さんもそのひとりね」
母がいった。
広一は、放心したように色とりどりのアーチでかざられた校庭をながめた。漠然とした疑惑が、いつのまにか確信に似たものになっていくのが自分でもわかった。
「ぼく、ちょっと行ってくる」
いうが早いか、広一は二年三組の席にむかって走りだした。
おかしい……あまりに妙だ。山沢典夫だけではなく、この学校には何人も典夫の仲間がいるとでも、いうのだろうか。
典夫に直接話してみなければならない。考えてみれば、典夫はたしかに常識をこえ

た生徒だった。スーパーマンという言葉があるが、それは架空の世界の話だ。だが、典夫こそまさにスーパーマンではなかっただろうか。
息せききってみんなのところへもどると、広一は叫んだ。
「山沢！　山沢！」
「山沢さんは、学年対抗のリレーに出るので、入場門へ行ったわよ」
女生徒が教えてくれた。
「あら、もう始まるわ」
観衆は、期待と興奮に満ちて、選手がスタートラインに立つのを見守っていた。目をこらして選手を見やった広一は、重いものが胸の底に沈んでくるのを感じた。
まちがいはない。
二年のアンカーのたすきをかけてすわっているのは、もちろん典夫だが、その両側にいる一、三年の代表は、たしかに典夫の仲間にちがいなかったのだ。ちょっと見ただけでは、まるできょうだいのような整った顔だち、しなやかな体……広一は女子のアンカーに目をうつした。やはり同じことだった。一、三年の列のいちばんうしろには、典夫にまさるともおとらない美少女がひかえている。

スタート！

まず女子の学年代表が走りだした。校内きっての走者たちだけあって、さすがに速い。みるみる校庭を一周すると、つぎの走者にバトンを渡す。

クラスメートたちが口々に叫ぶなかで、広一はじっと腕を組んで競技を見ていた。

第二走者は第三走者へ、つづいて、アンカーへバトンが渡った。

歓声は、とたんに倍くらいにはねあがった。一年代表と三年代表はまるでモーターカーのようにグッとスピードをあげると、足も折れよとかけだしたのだ。おそろしいスピードだった。十秒とたたないうちに、早くも百メートルを越えていたのだ。

全校庭が、異様な興奮につつまれた。だれもが何を叫んでいるのかわからないくらいだった。

広一はまたたきもせずに、競技を見守っていた。予感はあたったのだ。典夫の仲間は現実にいたのだ。

二年代表が最初の四分の一周にかかったころ、あとのふたりはすでに半分を越え、なおも疾走中であった。

しかし、このとき、異変が起こったのである。

ジェット機が学校の真上を低く飛びすぎていったのだ。その轟音（ごうおん）が校庭の喚声と重なった瞬間、典夫の仲間と思われるランナーはコースをそれて、まっすぐ校舎にむかっていたのだ。

驚きはそればかりではなかった。待機していた男子ランナー、そのなかの典夫たちが反射的に立ちあがると、どっと校舎へ走りはじめたのである。

校庭は異様な沈黙にのまれた。が、つぎの瞬間、みんなは口々に何かを叫びながら、校舎にむかって殺到していった。

乱闘！

いったい、何が起こったというのだ。

はじめのうち、自分の目が信じられなかった広一は、われに返ると同時に、猛然と走りはじめていた。

こんなことがあってよいものか……運動会のクライマックスに、レースを捨てて逃げだす選手たち……それも学年代表の、いまリードしているそのときに、たかがジェ

ット機の轟音ぐらいで……。
広一がかけつけたとき、人垣は波のようにくずれて、校門のほうに移ろうとしていた。
「つかまえろ！」
声がしている。
（いけない）
とっさに、広一は思った。
（これじゃ、騒ぎは広がるばかりだ……みんな群集心理にかられている）
彼は生徒たちをかきわけて、前へ前へと出ていった。
そして、ようやく前方が見えたとき、ぎくりとして立ちどまった。
三年生が校門に立ちふさがっているのだ。逃げだした五人の生徒は、うしろからせまってくる大群と、前方の三年生にはさまれて、まさに進退きわまっていた。
「とまれ！」
三年生がどなった。
「おい、おまえら！　なんのつもりだ！」

それは、気の荒いことで有名な数人だった。察するところ、自分のクラスの得点がよくないのでやきもきしていたところへこの事件だ。待ってましたとばかりケンカを売るつもりなのだろう。
「もどれ！　グラウンドにもどるんだ！」
「恥を知れ！　おまえら、それでも阿南中学の人間かあ」
「転校生のくせに、おれたち、まえから気にくわなかったんだ！」
五人の生徒は、じりじりと詰め寄ってくる三年生を見つめながら、一歩、また一歩と後退した。
しかし、うしろは、殺到してくる生徒や父兄の大群だ。
五人は、ぴたりと立ちどまった。
「おい、逆らうつもりか」
「違う」
典夫が叫んだ。
「そこをあけてくれれば、たいしたことにならなくてすむんだ」
「ねごとはよせ！」

三年生のひとりが、ずかずかと進んでくると、典夫の胸ぐらをつかもうとした。
同時に、何かがキラリと光った。典夫がポケットから何かを取り出したのだ。
見ている広一の胸の中を記憶が走った。そう、典夫が広一の部屋の隣に引っ越してきた日のことだ。あのとき、典夫は、ほんのわずかな停電だというのに、なんだかえたいの知れぬ熔解機のようなものを使ったではないか。
考えているひまはなかった。そんなことをしているうちに、取り返しのつかないことが起こってしまうかもしれない。
広一は、いま、典夫につかみかかろうとしている三年生のまっただなかにとびこんだ。
「なんだ、おまえ！」
「やめてくれ！」
広一がどなろうとしたときには、ひとりがうなるような速度で、すごいフックを入れてきた。
広一は腰をおとした。相手の足にとびつくと、片方をつかんで、力いっぱい立ちあがった。

相手の体が宙に舞うと、ダァンという響きとともに、地に落ちた。
「助太刀か？」
三年生がせせら笑った。
「おまえはクラス委員じゃないのか……それが、運動会をめちゃめちゃにしたやつらをかばうのかよ！」
「違うんだ」
広一はいった。
「それどころじゃない」
しかし、説明している余裕はなかった。えものを見つけた猛獣のように、その三年生たちは、どっと広一につっかかってきた。
(なるほど。愛校心は口実か)
広一は心の中で笑った。
(なんでもいい、理由を作って騒ぎを起こすつもりなんだな)
すると、心がにわかに澄んできた。ちらっと見ると、典夫たち五人は、腕を組みあって、じっとこちらを見つめている。

広一の目の前を火花が飛んだ。パンチだ。彼は手にふれたものを引き寄せると、やみくもにその足をはらった。つづいてにぎられた左腕を押し返し、もう一度強く押してくるところを、腰をひねった。

はらい腰。

相手の体は一回転して地面にたたきつけられる。

「なまいきな！」

たちまち広一は乱打を浴びた。ほおに、頭に、それから腰に……最後に、重いものが腹にくいこむと、彼はへたへたと倒れてしまった。

頭をかかえて倒れたまま、広一はやがてくるはずの足げりを待った。だが、それは、いつまで待ってもやってこなかったのだ。

ゆっくりと顔をあげる。三年生たちは、同級生とそれから先生たちに取り押さえられていた。

（よかった……）

同時に意識が遠くなっていった。

ここだけではない

どこか遠くで、おおぜいの声が聞こえる。

広一はぼんやりと目を開いた。午後もうおそい日ざしが、窓わくを通してうすく床に落ちていた。

保健室だった。

「あら」

声がした。

「気がついたのね」

顔をめぐらすと、父と母の顔がそこにあった。

「痛むか？」

父がたずねた。

いわれてみると、頭や腕には包帯が巻かれていて、すこしばかりずきずきする。広一はかすかにうなずいてみせた。

「あの連中、三年では札つきだったらしいな……」
と、父。
「しかし、なかなか勇敢だったそうじゃないか」
「こんな乱暴なことをして……もしものことがあったら、どうするの？」
「あまりいってやるなよ」
「だって……」
「男というものは、そんなものだ」
父と母のやりとりを聞きながら、広一はぼんやり天井を見つめ、それから目をとじた。どうやら父と母、いや、学校の大多数が、まるで広一が五人の転校生をかばったように考えているらしいのだ。
しかし、そんなことを説明したところで、どうなるというのだ。それに、広一は、あの五人が校門に追いつめられたときの表情を忘れることができなかった。まるで世の中のすべてに絶望したような暗い目で、三年生たちや、あとから追ってきた生徒たちを見つめていたではないか。なかでも、典夫の表情ときたら……。
あの連中、ひょっとしたら、おびえていたんじゃなかろうか、と広一は思った。

考えてみれば、奇妙なことばかりだった。広一が初めて典夫の異様な行動を目撃したのは、エレベーターの中での停電のときである。それから、放射能を含んだ雨にぬれるかもしれないといったとき……ついで、こんどのジェット機の轟音だ。
何かがある……広一は考えつづけた。典夫をはじめとして、あの転校生たちは、きっと秘密を持っているのだ。
「それで……」
広一は目を開くといった。
「みんなどうしたの？」
「おまえのけがが、たいしたことなさそうなんで」
広一の質問の意味をとりちがえた父が説明した。
「わたしたちは、運動会をつづけるように、先生がたにたのんだのだ。……もうそろそろ終わるころだろう」
「だいじょうぶ？」
だしぬけに大きな声が、保健室の中にとびこんできた。大谷先生だった。
大谷先生は、父と母にわびを何度もいうと、こんどは広一に向きなおった。

「ほんとにだいじょうぶ？　お医者さんは、けがはたいしたことはない……軽い脳震盪をおこしただけだとおっしゃっていたけれど……」
「いや、もうだいじょうぶです」
そう答えたのは父だった。
「三日もすればよくなりますよ」
「ありがとう、岩田くん」
大谷先生が頭をさげた。
「あのままじゃ学校じゅうが乱闘になるところだった……よく止めてくれたわね」
「でも、こんな妙な事件、きっと大問題になりますわ」
母がつぶやくようにいう。大谷先生はそれを肯定もせず、否定もせずといった調子でうなずいてみせた。
「あの三年生たちはいま、生活指導の先生によばれています」
「新聞や、警察の人もきていたようですが……」
「ええ。それが妙なんです」
「……………」

「こんな事件は、うちが初めてじゃないっていうんです」
「なんですって？」
おどろいたのは広一だった。彼は体を起こすと、たずねた。
「同じような事件が、ほかでもあるんですか？」
「広一！」
「だいじょうぶだよ。それよりも……ね、先生、それはどういうことですか？」
「大阪市内の……」
大谷先生はひとみを澄ませるとつづけた。
「小学校や高校を含めた十数校で、同じような転校生のために、いろんな事件が起こっているというのよ」
「……………」
「それでね……しらべてみると、みんなお人形のようにかわいくてね、学業もスポーツもずばぬけているんですって……。それから」
先生はそっと窓の外を見た。父も母も広一も息をつめて、つぎの言葉を待った。
「その転校生はね……、みんな同じ日に大阪市内に転居してきたらしいのよ」

こんどこそ、広一はおどろいた。偶然だろうか……いや、偶然にしてはあまりに話が合いすぎている。

「妙ですな。で、その子たちの戸籍はどうなっているんですか？」

「戸籍はちゃんとあるんです。ある新聞社の人が警察から聞きこんだところによると、全員、東京都内の同じ区にあるということです」

「…………」

「どうやら、これは、阿南中学だけの問題ではなさそうです。あまりに奇怪なことなので、警察側が、新聞社のかたに、もうすこしはっきりするまで発表を見合わせてくれないかと、たのんでいるらしいんです」

「で、新聞社は？　承知したんですか？」

「さあ」

先生は首を振った。

「いままでの事件というのは、新聞にのせるほどのものじゃなかったけど、こんどはどうでしょうか」

「いったい、何をするつもりなんでしょう」

広一はたずねた。

「みんなでしめしあわせて、この大阪を、どうかするんでしょうか」

「わからないわ」

さすがの大谷先生も首を振るばかりだった。

「これから何が起こるのか……わたしにはわからない」

しかし、話はそこまでしかできなかった。運動会が終わったため、クラスメートがどやどやと保健室の中になだれこんできたからである。

にくしみに燃える目

広一のけがは、たいしたことはなかった。なんといっても若いのだし、それにかすり傷や打ち身だけだったので、運動会の翌日の休日をおくと、すっかり元気になって登校することができたのである。

教室にはいった広一は、クラスの雰囲気ががらりと違っているのに気がついた。ひとことでいえば、みんながひどく広一に好意的になっていたのだ。

「もういいの？」
みどりがたずねた。
「ずいぶんなぐられたそうじゃない」
「なあ岩田、おまえちょっと格好よかったぞ！」
ひとりがいった。
「おれ、おどろいちゃった」
別の生徒が肩をすくめた。
広一はみんなに囲まれながら、ちらりと教室のすみを見る。
そこには典夫がいた。ぽつんとひとりすわったまま、こちらを見ている。その視線が広一のそれと合うと、典夫は目をふせた。
広一は内心、いささか得意だった。あの傲慢（ごうまん）な典夫がそんな態度を示したのだ。自分を見舞いにもこなかったことも忘れて、広一はわずかながら典夫に好意を持ったくらいである。
それは、どうあがいてもどうにもならなかったライバルに、初めておぼえた優越感のなせるわざだということも、広一にはよくわかっていたが……。

だが、一時間目の授業が始まると同時に、とんでもないことがもちあがるとは、まだ広一は気がついていなかった。
「ああ岩田くん」
教室へはいってくるとすぐ、大谷先生は広一を認めて呼びかけた。
「もういいの？」
「ごらんのとおりです」
広一は立ちあがると、体のあちこちをたたいてみせた。
「完全復旧」
みんながどっと笑った。
「栄養がいいからな」
と、だれかがいう声もまじった。
先生はちょっと微笑すると、こんどは典夫のほうをむいた。
「山沢くん、岩田くんにお礼をいったの？」
「そんな必要はないと思います」
典夫が静かに答えたので、いままで浮いていたクラスの気分は、いっぺんに重くな

ってしまった。
「でも、山沢くん、あなた助けてもらったんじゃない？」
「そうだ、そうだ」
クラスの連中が、がやがやいった。
「運動会のさいちゅうに逃げだすなんて、三年生でなくったって、怒るのがあたりまえだ」
「ぼくはあんなやつ、いつでもやっつけられたんだ！」
ひびきわたった典夫の声に、教室は騒然となった。
「卑怯よ！」
「いまなら、なんでもいえるさ！」
という声が乱れとんだ。
典夫は立ったまま、じっとクラスをながめわたした。
（あの目だ）
広一は感じた。（にくしみに燃えている目だ）
「ぼくはたしかに軽率でした」

典夫は押し出すようにいいはじめた。
「ぼくはたしかに、ジェット機の音におどろいて逃げた……しかし、なぜ、それでなぐられなくちゃならないんです？　なぜ、みんなにそんな目で見られなくちゃならないんです？」
教室じゅうがシーンと静まりかえっていた。
大谷先生も教科書とチョークを手にしたまま、あきれたように典夫を見つめているばかりだった。思いもかけぬ典夫の発言に言葉もないという感じである。
「ぼくは、いやぼくたちは、といおう。もういまじゃだれでも知っている……ぼくたちはあんな連中にいくらとりかこまれたって、なんともないんだ。ぼくたちはパラライザーというものを持っている。それさえ使えば、あんなやつの十人や二十人……」
「ね、岩田くん、パラライザーって何？」
香川みどりが早口にささやいた。
「神経麻痺銃(しんけいまひじゅう)さ。マンガなどによく出てくるやつだ」
「だから、べつに助けてもらう必要はなかったんだ……だいいち、みんなは、ぼくたちのことを、何かといえば笑う……なぜおかしいんだ？　あんなすごい音を聞いて、

平気なほうがおかしいんじゃないのか？」
　典夫の声は、しだいに悲愴な感じさえおびてきた。
「みんな、知らないんだ。怖さを知らないんだ」
「どういう意味？」
　やっとわれに返った大谷先生が、ぼんやりとたずねた。
「ミサイルですよ！」
　わかりきっているといわんばかりの典夫の口調だった。
「原子爆弾……水爆……ニュートロン爆弾……ミサイル……そんな、いつ頭の上で爆発するかわからない世界に住んでいて、よくそれだけ平気でいられますね。このD—15世界じゃ、なるほどすこしばかり科学の発達はおくれています。が、どうせ時間の問題なんだ……おそかれ早かれ、核戦争は起こるんだ……ぼくたちは、ここなら核戦争は起こらずにすむと思ったのに……」
　典夫は泣いていた。
「……核戦争のおそろしさを知っている者がいるか？　ひらめく閃光……倒れる何百万の人々。苦しみながらコンベアーの上を流れてゆく男女……刻一刻とせまってくる

死の灰……滅亡しながら、それでもめちゃくちゃに飛びたってゆく報復ロケット……血だ！　焼けただれたはだかだ！　あの暮れゆく空につっ立つ、もも色に光る半球形の雲……助けてくれ！　助けてくれェ！」
「やめなさい！」
　大谷先生が、典夫の肩を激しくゆすぶった。
「山沢くん！」
「……ぼ、ぼくは」
　あえぎながら、典夫は口を開閉した。
「逃げて……」
「しっかりしなさい！」
　典夫は大きく息をついた。
「そうです……ここはまだ、核戦争にはなっていなかったんです……とり乱してすみませんでした」
　もはや教室のだれひとり、笑いもしなければ、ののしりもしなかった。みんなは魚のようにだまったたまま、大谷先生と典夫を見つめているばかりだった。

くずれるようにいすにすわった典夫に、大谷先生はやさしくいった。
「気分が悪いんじゃない？」
典夫はうなずいた。
「すみません……早退してもいいでしょうか」
「いいわ」
先生はいった。
「あなたの家は近いんだから、気分がよくなったら、また出てきてもいいのよ」
「はい」
典夫は素直に荷物をまとめると、ふらりと立ちあがった。
「送っていこう」
広一は思わず声をかけたが、典夫はかすかに首を振った。
「いいんだよ」
ドアがしまり、足音が遠ざかってゆくあいだ、教室はまるで死んだようだった。
が、だしぬけにだれかが、吐息をもらすようにいった。
「あいつ、本物の核戦争を見たんだ！」

そんなことがありうるのだろうか？　広一はぞっとしながら考えた。
あの声といい、表情といい、たしかに典夫は体験者のようだった。それもミサイルが飛びかい、都市という都市が蒸発してゆく世界を、まるで見ているかのようだったではないか。
とすれば、なぞはすべて解ける……。いつも核戦争の恐怖におびえながら生きてゆく人間にとっては、たとえ自動車のパンクする音であっても、感覚的に恐怖の再現になるだろう。
しかし……広一は首を振った。それじゃ、典夫はどこからきたというのだ。この地球上ではまだそんな状態は起こっていない。それに、典夫は、ここがD—15世界だなどといった。なぞは解けたのではない。逆に深まってしまったのである。

ぼく行ってくる

その夜のことだ。
いつものように補習でおそくなった広一が帰ってみると、父と母が食卓で、何かひ

そひそと話しあっていた。
「ああ、広一か」
顔をあげると、父がいった。
「まあこれを読んでごらん」
夕刊だった。
「どうかしたの？」
いいながら目をうつす。とたんに大きな見出しがとびこんできた。
〝大阪に出現した天才少年少女〟
そしてその横には、〝まったくのなぞ〟とか、〝常識では説明できない数々の行動〟
などと書かれている。
広一はどきんとした。その記事を息もつかずに読んだ。
やはり、典夫たちのことであった。最近大阪に移ってきた少年少女が、ふつうでは考えられないようなすぐれた頭脳と、運動神経を持っていること。その正体については、だれも知らないということが、いろんな実例とともにしるされていたのだ。
読みながら広一は、きょう学校で起こった事件のことを思い出していた。あのと

き、典夫は狂ったようになって、核戦争の恐怖を訴えつづけていた。それは、まるで現場にいるような迫真感と恐怖に満ちたものであった。
どう考えても、お芝居ではない、と広一は思った。実際にそうした世界の終末を見てきたかのように、泣きながら叫んでいたではないか。
「広一、どうした」
父がたずねたので、広一はきょうの話をかいつまんで話した。
「妙だな」
「なんだか、気味が悪いわ」
「でも、ぼく、山沢くんは、ほんとうのことをいったんだと思うよ」
広一は考え考えいった。
「なんだか、ぼくたちまで、髪の毛が逆立つような感じだった」
「とにかく、これからお隣は、いろんな連中の訪問で悩まされるだろうな」
と、父。
「どっちみち、山沢一家は決して会おうとしないだろうが」
「ぼく、ちょっと隣へ行ってみるよ」

だしぬけに広一がいいだしたので、父も母もびっくりしたように息子の顔をながめた。
「行って、どうする？」
「まだごはんも食べていないじゃないの」
「いいんだ」
広一は唇を結んでいった。
「それに、きょう学校であったことも連絡しないといけないし」
「さあ……どうかなあ」
父は懐疑的だった。
「お隣じゃ、うるさく干渉されるのは、いやだろうと思うがね」
「でも……やってみる」
そのときにはもう、広一は玄関でサンダルをつっかけていた。
「帰ってきたら、ごはん食べられるようにしておいてね」

不適応者かね

予想どおり、何度ブザーを押しても、山沢家からはだれひとり出てこなかった。きっといつものように、外部の人間を極度に警戒しているのにちがいない。
なんのためにこんなことをしているんだろう……広一はふと自分がばかばかしくなった。
でも、かまうもんか。広一には用事があった。それが、典夫にきょうの学校のことを報告するという、ささやかな用事であり、典夫自身にとって一日ぐらい学校へ行かなくってもぜんぜん影響がないのはわかっていても、とにかく、用事にはちがいなかった。
広一はドアをたたきはじめた。
「ぼくですよ！」
叫んでみる。
「典夫くんと同じクラスの、隣の岩田広一です」

すると、ドアがわずかに開かれた。

典夫の目がちらっと見えた。

「なんの用？」

「きょうの連絡にきた」

広一は必死でまくしたてた。

「それに、きょうの夕刊を見たろう？　できることなら一度、ゆっくりと話をしたいんだ」

典夫がだまっているので、広一はしゃべりつづけた。

「きみたちは知らないだろうが、きみたちのことは、いまじゃ、みんなのうわさのまとなんだよ！　もしぼくにできることがあったらなんでもする。だから一度ゆっくりと話をさせてくれ！」

「典夫、入れてあげたらどうだ」

奥から声がした。典夫のお父さんの声らしかった。

典夫はドアを開くと、しばらく広一を見つめていたが、やがて、

「はいれよ」

と、短くいった。

広一はよろこびをかくすことができなかった。あんなにも固くとざされていた、この山沢典夫の家に初めてはいることができる。なぜ広一にだけ、そんな特典が与えられたのかを考えるまえに、彼は玄関の中にふみこんでいた。

しかし、広一はそのまま、ぎくりとしてつっ立つほかはなかった。

先客がいたのだ。２ＤＫの団地の部屋にあふれるように、何人かの大人がすわりこんでしゃべっていた。それが、広一がはいると同時にいっせいに振り向いたのだ。高い鼻、澄んだひとみ、整った十何人かの白い顔が、じっと広一を見たのである。

なかのひとりが立った。典夫のお父さんだ。

「こちらへ」

「はあ」

もじもじする広一を、典夫がつついた。

「早く、あがれよ」

それは妙に親しみのこもった声であった。はっとした広一が振り返ったとき、典夫はにっこりしてみせたのである。

そんな微笑を、広一はいままで見たことがなかった。それほど明るく、美しい表情だったのだ。

（どうなっているんだ）

広一は混乱した頭の中で考えようとした。が、さっぱりわけがわからないので、いわれるままに、奥の部屋に人々をかきわけながらはいっていった。

典夫のお父さんは、広一の横に立つと、何やらわからない言葉で早口に説明していた。一段落ついたのだろう、こんどは広一のほうに向きなおると、やさしく語りかけた。

「岩田広一くん、だったね」

「はい」

異様な雰囲気にのまれたまま、広一は答えた。

まったく、なんというながめだったろう。外から見えない奥の間にあるのは、ふつうの家具ではない。にぶく光る複雑な金属製の、見慣れぬ道具ばかりである。そういえば天井からさがっているのも、ただの蛍光灯ではなく、放射状をした光る物体がいくつか重ねられたもので、まるで別世界にでもきたようだった。

「きょうの夕刊にも書かれてしまったことだし……それに、きみはもう気づいていると思うが、ここにいるのは、みんなわたしたちの仲間なんだよ」

典夫のお父さんはいった。

広一はしだいに不安になってきた。こんなことを見たり聞いたりして、自分はだいじょうぶなんだろうか。あとで秘密がもれないように処分されてしまうんではないだろうか……。

しかし典夫のお父さんは、それを見抜いたように、ゆっくりとしゃべりはじめた。

「心配しなくてもいい……わたしたちは、スパイでもなんでもない。理解してくれる可能性のある人には、いつでも真実を見せることにしている」

「…………」

「いまは説明できないが」

典夫のお父さんは緑色がかった明るい光の下で、ちょっと顔をしかめた。

「わたしたちは、ある集団なのだ。それも、秘密結社でもなんでもなく、ごく平和な目的のための集団なんだよ」

「それが……」

「まあ聞きなさい。わたしたちは、この世界……」
「D―15世界ですか？」
広一がすばやく反問したので、典夫のお父さんはちょっとだまった。それから覚悟を決めたようにつづけた。
「そう、このD―15世界で、うまくみんなととけあって暮らしていくつもりだった。しかし、それがどうも、いろいろ不都合な点が出てきたらしい。はっきりきくが、わたしたちは不適応者かね？」
「不適応者？」
「つまり、みんなとなじめない、別の人間のように見えるかね？」
「とんでもない」
広一は断言した。
「立派にみんなと生活していけます……ただ」
「ただ？」
「ひとことではいえませんが」
広一はすっかり自信を取りもどしていた。

「みなさん、あんまり優秀すぎるんです。それに、すごく神経が細い」
「…………」
「みなさんがなんだか、ぼくは知りません。でも、ふつうの人間なら、もうすこしにぶくて、のんびりしています。それが、かえっていけないんじゃ……」
「ねえ、きみ」
ひとりがたずねた。
「ひとつの世界で安全に暮らすためには、何事にもずばぬけているのがいちばんたしかだ……そうじゃないだろうか」
むずかしい質問だった。だが、それはどことなく違っているように思われた。
「よくわかりませんが……そうじゃないように思います」
またひとりが質問をしようとしたが、典夫のお父さんは手をあげて制した。
「きょうは初めてこの世界の人と直接話しあったんだ。このくらいでいいでしょう」
全員がうなずくのを見て、典夫のお父さんは広一の肩をたたいた。
「ありがとう。わたしたちは、もっと、みんなとなじむようにしなくちゃならないようだ」

それから笑ってこうもいった。
「この家のことはだれに話してくれてもいい……わたしたちは、そのくらいのことをするべきだった」
典夫に送り出されながら、広一は呆然としていた。いまだに夢を見ているような、そんな気持ちだった。
しかし、典夫たちがなぜ突然に、広一に好意的な態度をとるようになったのか――それは翌日になっていささか思いあたった。

たいへんなの

すがすがしい朝だった。窓をあけっぱなしにしていると、すこし冷たいくらいの風が音もなくはいりこんでくるのだ。
教室の空気も、運動会まえとは、すっかり違っている感じだった。なんといってもみんなの頭の中には、高校受験のことがそろそろのしかかってきていたのだ。
大谷先生は、そうしたクラスの感じを気にしているのかいないのか、淡々と出席を

とってゆく。
「松田（まつだ）くん、松宮（まつみや）くん、村上（むらかみ）くん、村橋（むらはし）くん……」
そして最後が典夫だった。
「山沢くん……山沢くん？　ああ、欠席しているのね」
先生は目をあげた。
「だれか、山沢くんのこと、聞かなかった？」
みんな、何もいわなかった。それから期せずして、その視線が広一のほうに向けられたのだ。
「ぼくも、知りません。きのうの晩、会ったんですが……」
広一がいいかけると、たちまち全員が、がやがやしゃべりはじめた。
「それ、ほんとう？　岩田くん」
「ぼくがなぜ、うそをいわなくちゃいけないんです？」
広一は心外だといわんばかりに大きな声を出した。
「たしかにぼく、きのう山沢くんの家に行きました……でも、きょう欠席するということは知らなかったんです」

「おどろいたわ」
香川みどりが嘆息(たんそく)まじりにつぶやいた。
「いままで山沢くんの家の中にはいった人ってなかったのに……どういう風の吹きまわしなの？」
「岩田くん……」
大谷先生が呼んでいた。
「岩田くん！」
「はい！」
「あとで……」
先生は、広一とみどりを等分に見ながらいった。
「職員室にきて、山沢くんがどうだったか、話してちょうだい……わかった？」
「……はい」
「よろしい。それじゃ教科書を開いて！」
先生は、もういつものきびしい大谷先生にもどっていた。
「ね、岩田くん」

みどりがしきりに広一をつっついていた。
「ほんとうに山沢くんの家へ行ったの？　中にはいったの？」
広一はみどりをじろりと見た。
「うるさいなあ、いまは授業中だよ」
「まあ」
みどりはつんとして、それっきり広一に話しかけようとはしなかった。
まあいいさ……と広一は思った。怒るんなら、怒っていればいい。
それにしても、きのうはいったい、どういうわけで、あんなふうに親切にしてくれたんだろう。わざわざ集会らしいところへまねき入れて、いろいろきくなんて……。おかげで食事のことさえ忘れていて、父さんも母さんもびっくりしていたっけ。
それに、広一にはあのときの典夫の笑顔が忘れられなかった。人間っていうのは表情ひとつでどんなふうにも見えるという。あんなに美しい笑いというものを、広一はかつて見たことがなかったのだ。
……ぼくはどうかしているぞ、と広一は思った。授業中だというのに、これじゃ復習がたいへんだ。もっと身を入れなくちゃ。

しかし、それはけっきょく実現しなかった。なぜならそのとき、ばたばたと足音がして、教室のドアががらっと開かれたのだ。

「だれ？」

先生が振り返るのと同時に、広一は叫んでいた。

「母さん」

「ああ、広一」

母はすっかりうろたえていた。

「たいへんなのよ……いま、団地で……団地で」

「なんだって？」

「お隣のね」

母はしばらく荒い息をつくと、またいいだした。

「山沢さんちでね、ひどい騒ぎが起こっているの」

「え？」

「で、山沢さんがね、すぐにあなたにきてほしいっていっているのよ。母さんどうしようかと思ったけど、たいへんな騒ぎでしょう……だから」

「先生！」

広一はいった。

「ぼく、ちょっと帰りたいんですが……いけないでしょうか」

「おれも行くぞ！」

「あたしも」

「ぼくだって、いっしょに行くよ」

クラスの全員が、いっせいに立ちあがっていた。

そのままどっと外へあふれ出ようとしたときだ。

「いけません！」

凛(りん)とした声がひびきわたった。大谷先生だった。

みんなは棒をのんだように立ちどまった。先生はきびしくいった。

「授業中ですよ。あなたたちは勉強のためにここへきているんです」

強い声だった。

「呼ばれたのは、岩田くんひとりなんです。岩田くんは帰りなさい。でも、みんなが教室を出るべきじゃありません」

みんな、がやがやと席についた。広一が母といっしょに出ようとしたとき、みどりが廊下まで追ってきた。

「岩田くん！」

みどりは、ひとみをじっと広一に向けた。

「山沢くんのこと、お願いね」

「きみ……」

広一は胸をつかれた思いだった。

「きみは……山沢が……好きなんだな」

みどりは何もいわなかった。ただ、こっくりとうなずくと、身をひるがえして教室の中へ走りこんでいった。

だから撃ったんだ

母といっしょに団地まで帰ってきた広一は、思わず目をみはった。

エレベーターの前には、管理人が立ちはだかって叫んでいる。

「故障です！　故障ですから、階段をのぼってください」

エレベーターホールにひしめいているのは、カメラマンなどのマスコミ関係者とおぼしき人々だった。ふたりは階段をかけのぼった。途中で母が疲れてしまったので、四階からは広一がひとりで二段とびにかけあがっていった。六階まできたときには息がきれて、はあはあいいながらのぼるしまつだった。

だが……六四〇号室の前にきた広一は、あっと叫んだ。

ドアの前は、人でいっぱいなのだ。団地の人々、それに新聞記者やカメラマンのほかに、テレビカメラを持っている人さえいるのだった。

「あけろ！」

人々はどなっていった。

「あけないのか！」

「どうしたんです」

顔見知りの団地の人をつかまえて広一がたずねると、その人はおそろしそうに答えたのだ。

「どうもこうもありませんよ……六四〇号室の人が、なんだか人にけがをさせたとい

うことなんです」
「けが？」
「そうだ。わしは見たぞ」
やじ馬のひとりがどなった。
「さっき病院へ連れていかれたんだが……すごいやけどだ。服なんか、ぼろぼろに焼けていたよ。助かることは助かるらしいがね」
（しまった！）
後悔のようなものが、広一の胸に突きささった。
（きっと、山沢家の者が、何かの武器を使ったんだ……いつかは、こんなことになると思っていた）
「ぼくの友人を呼んでください！」
ののしりあう声のなかに、少年の鋭い叫びがまじっていた。
（典夫だ！）
「ぼくは、きみたちと直接話をしたくないんだ」
「なにを？」

「ばかをいうな！」
怒号が乱れるなかを、広一は必死で人垣をわけてはいりこんでいった。はねとばされそうになるのを、無理しながら、いちばん前に出た。
「そっちが悪いんじゃないんですか」
ドアの内側で典夫は叫んでいるのだった。
「ぼくの話がわかる友人を呼んでください！　岩田広一っていうんです」
「ぼくだぞ！」
広一がどなると、ドアが開いた。
手を引っぱられて広一は、六四〇号室の中へよろめきながらはいった。
外の叫び声はいっそう高くなった。
典夫は泣き笑いのような顔で広一の手をつかんだ。
「よくきてくれたね」
「信じられるのはきみだけだ。ぼくらをほんとうに人間らしくあつかってくれたのは、いや、特別な目で見なかったのは、きみだけだった」
「しっかりしろ！　どうしたんだ」

広一はどなった。
「ぼくが留守番をしていたら、知らない男がどう工作したのか、マスターキーでドアをあけてはいってきた……そして、写真をとりまくるんだ……そんなことしなくたって……」
典夫は泣いていた。
「だから、ぼくはレーザーで撃ってやったんだ」

この世界には住めない

広一はしばらく、典夫の顔を見つめていた。
レーザーだと？
彼は以前、原理については聞いたことがあった。結晶ルビーの両端に反射膜を作り、光線を送りこむと、中で光は出ることができず激しく往復する。そしてある限度に達すると、うすいほうの反射膜を突きぬけてビームがとび出すのだ。開発の初期の説明ではそういうことだったらしいが、その後いろんなレーザーが出てきて、すでに

現代では、いたるところで使われている。だから、レーザーそのものは知っていた。そのなかでも強力なものになると、金属でさえたちまち蒸発してしまうくらいの威力を持つという。
だが、それを武器として使うとなると、まだまだ映画やマンガの中のことでしかない。すくなくとも、いま典夫の手にある、銃身の太い、先のとがったピストルのようなものは一般的にはなっていないはずだった。
「それで、侵入した人を撃ったんだな？」
広一はたずね、典夫はうなずいた。
「すこし、ひどすぎたんじゃないか？」
「じゃ、どうすればよかったんだ！」
「しかし」
典夫はくやしそうに叫んだ。
「だまって、家の中を荒らされるままにしておけとでもいうのか？」
「ぼくはこれでも、レーザーの目盛りを最低にしてから撃ったんだ！」
声がふるえた。

「ぼくは殺人なんか、したくなかった。だから警告程度でやめておいたんだ！　それを……それを……」

「わかった」

広一は典夫の肩に手をおいた。

「ぼくにまかせるんだ」

典夫の顔が、一瞬パッと明るくなったが、しかしすぐ、もとの暗さにかえってしまった。

「だめだ」

と、典夫はつぶやいた。

「みんな、あんなにさわいでいる……もうどうにもなりゃしないんだ」

「だめかどうか、やってみようじゃないか」

広一は強くいった。

「なんなら、ぼくがひとりで外の連中に話してやる。何もしないでここにいたら、かえって悪くなるばかりだぞ」

事実、広一のいうとおりだった。さきほど、いったん静まりかけたやじ馬は、中かなんの返事もないと知ると、ふたたび猛然とわめきはじめていたのだ。

「出てこい！」

「おまえらのこと、新聞で読んだぞ！」

と、どなる声もまじっていた。

「天才かなんか知らないが、人をけがさせておいて、それですむと思うのか！」

「そうだ、そうだ」

ののしる声は、鉄のドアまでふるわせているようだった。

「行くぞ」

広一はいった。

「きみはここで、じっとしているんだ」

「待ってくれ」

典夫は広一の服のはしをにぎった。

「いま出ていったら、きみまであぶない……な、やめてくれ」

広一は微笑した。ふいに典夫に弟のような感情をおぼえたからだ。この美貌で、意地っぱりで、すばらしく頭のよい少年の内心は、だれにもまして神経質で、外からの

圧迫をおそれていることを、そのとき悟ったのである。
「やってみなきゃ、何事だって、結果なんかわからないさ」
広一はいうと、典夫の手を振りはらって、ドアをあけた。
同時に、廊下にひしめいていた群衆が、どっと後退した。が、出てきたのが広一だとわかると、こんどはじりじりと詰め寄ってきた。
「あの子どもはどうしたんだ？」
いつも団地の中をうろうろしている、やくざっぽい青年が叫んだ。
「あいつを引っぱり出さないのか」
「みなさん」
広一はどなった。
「みなさん、聞いてください」
がやがやいう声が、しだいに低くなっていった。
広一は集まっている人々を見た。なかば好奇心、なかば義憤にかられた表情だった。
「みなさんのなかに、さっきけがをした人の知り合いがいますか？」

広一は問いかけた。みんなは顔を見合わせたが、だれひとりとして知っている者はなさそうだった。
「あの人は、この山沢くんの家にだまってはいってきて、写真をいろいろとっていたそうです」
「いいかげんなことをいうな！」
さっきの青年だ。
「それは、あの家の中にいるやつがいっているんだろう？」
みんな、いっせいに、がやがやとしゃべりだした。
（ここだ）
と、広一は思った。彼は大きな声を出した。
「だれか、事故の現場を見た人、いますか？」
「あたしが見たよ」
太ったおばさんがとび出してきた。
「そりゃもうひどかった……服はこげて、あちこちやけどをして……」
おばさんは、にくにくしげに広一を見た。

「あんな子、警察に突き出してやればいいんだ……だいいち、あんたみたいな子どもの出る幕じゃないよ」
「そうだ、そうだ」
「なんの関係があって、そんなところに立っているんだ」
「やめてください！」
凜とした声で広一が叫んだので、大人たちはちょっと、あっけにとられたようだった。
「そこのおばさん！」
広一は鋭くゆびさした。
「たしかに事故の現場を見たんですね？」
おばさんはぐいとあごを突き出した。
「ああ、あたしゃ、ようく見たさ」
「それじゃおたずねしますが、山沢くんがけがをさせたのは家の中でですか？　外でですか？」
「……………」

「そういえば、ドアをあけて外へ出てきて倒れたな」
ひとりが腕組みしてつぶやいた。
「とすると、悪いのはあの子ともいいきれんわけか」
「じょうだんじゃないよ」
おばさんは、なおもいった。
「ひどいけがだったよ。あんなけがさせて……」
「それは警察の人が決めます！」
広一は手を広げた。
「みんな、帰ってください。もうここには用はないでしょう。山沢くんはとても気がたっているんです」
「おまえこそなんだよ」
青年だった。
「おまえだって、帰ったらいいんだ」
「ぼくは山沢くんのクラスメートで、この隣に住んでいるんです」
広一は鋭くいいかえした。

「みんな、帰ってください！」
やじ馬たちはだまった。が、明らかに不服そうだった。
「そのとおりだ！」
突然、人々のうしろでどなる声がした。
「広一のいうとおりだ！」
父だった。母もそのうしろについていた。父は群衆をかきわけて出てくると、大きく手を振りまわした。
「わたしは、この子の父親だ……あんたら、子どもふたりをいじめて、それで、はずかしくないのかね？　それとも、リンチでもしようというのかね？」
みんなは、ぞろぞろと散りはじめた。広一の父は腰に手をあててそれを見てから、息子のほうに振り向いた。
「忘れものをして、もどってみたらこのしまつだ。……しかし広一、よくがんばったな」
「わたしが前へ出ようとしたら、父さんがそうさせなかったのよ……広一に最後までやらせてみろってね」

母は泣き笑いのような表情でいった。
広一の胸は、ちょっとばかり熱くなった。
「ところで典夫くんはいるのかね？」
父がたずねた。
「警察の人が、事情をききにきておられるんだ」
「この家ですな？」
警官が近づいてきた。
「ちょっと、しらべさせてもらえますか？」
広一は、六四〇号室のドアを押した。
「山沢！　山沢！」
返事はなかった。
「おかしい……」
広一は靴をぬぐと、室内にとびこみ、大声をあげようとして、思わず口に手をあてた。
典夫は……いた。奥の、例の奇妙な道具類の並んだ部屋に立っていた。いや典夫だ

けではなく、典夫の両親もいっしょに、じっとこちらを見つめていたのである。

（ど、どうしたんだ）

広一は、ぞっとしながら考えた。

（さっきまで、たしか、ここには典夫だけしかいなかった……あれから、だれもこの家にははいらなかった……）

が、そのとき、典夫のお父さんが広一にいった。

「連絡を受けて帰ってきたんだが……話は聞きました」

そして、さびしそうに首を振った。

「わたしたちはもうこれ以上、この世界にはいられません」

「……」

「でも、まず責任をとるのがさきです。わたしたちはこれから典夫といっしょに警察へ行きます」

すると突然、典夫が叫びだしたのだ。

「ありがとう！　ぼくはきみに、なんとお礼をいっていいのか、わからない……」

典夫は手の甲で顔をこすった。

「はじめから、へんに特別あつかいしなかったのはきみだけだ……ぼくは最初こそ、すごく腹がたった……でも、きみのやり方がほんとうだった……ぼくはこのごろになって、わかってきたんだ」

「さあ典夫、行こう」

お父さんがうながしたが、典夫はそれを制止してつづけた。

「ぼくの失策で、仲間はもうこの世界にはいられない……でも、きみのことは決して忘れないよ」

「待ってくれ」

ようやく広一は、しゃべることができるようになった。

「きみら、いったいどうしようというんだ」

「今夜、団地の屋上へきてくれ」

外へ出ようとしながら、典夫は振り向いていった。

「今夜、九時だ。そのとき話す」

広一はつづいて質問しようとしたが、もうそのときには待ちきれなくなった警官や、広一の両親がしきりに呼んでいた。

「出よう」
典夫のお父さんがうながした。

全員が消えた

父がこんどはほんとうに会社へでかけていったあと、広一もまたバッグを手に、阿南中学へもどった。
校門をくぐったときには、ちょうど五時間目を知らせるベルが鳴りひびいていた。
広一は校庭をつっきり、授業の始まる直前に教室へすべりこむのに成功した。
「あっ、岩田だ！」
ひとりが叫び声をあげると、クラスの全員が立ちあがり、どっと広一をとりかこんだ。
「どうだったんだ！」
「山沢、何をしたんだ？」
ちょうどそのとき、教室にはいってきた国語の先生は、しばらくあきれてものもい

えず、教壇に立ったまま、二年三組の騒ぎをながめているばかりだった。
「静かに！」
広一はどなった。
「あとで……話す。授業だ！　授業中だ！」
それでも、まだしばらく、みんなは騒ぎをやめなかった。ようやく静かになったときには、もう授業時間は、十五分ほど過ぎてしまっていた。
「岩田くん！」
みどりがしきりに広一をつついた。
「岩田くん、たら」
広一はみどりのほうを見た。するとどうだ、香川みどりは広一に、小さくたたんだ紙片を渡したのである。
「そこの、ふたり！」
先生がどなった。
「何をしているんだ？」
広一は紙片をにぎったまま、国語の先生を仰(あお)いだ。

先生はずかずかと教壇をおりると、ふたりのほうへやってきた。かんしゃく持ちで有名な国語の先生、それも、授業の始まるまえ、騒ぎをにがにがしく見ていたのだからたまらない。広一は覚悟を決めた。

「香川、岩田に、何か渡したね？」

先生はみどりをにらみつけ、それから広一に手をさしだした。

「見せなさい」

広一はちらっとみどりを見た。

みどりはうつむいていた顔をあげると、目で小さくうなずいてみせた。

広一は紙片をさしだした。

「きみたち、プライバシーの侵害というんだろうな」

紙片を広げながら国語の先生はいった。

「なんといわれてもかまわん。わしはやかまし屋だといわれてもいい……しかし、考えてみろ、もうまもなく三年になるんだぞ……それを、ばか騒ぎで時間をつぶし、そのうえ、こんな手紙のやりとりをするとは！」

先生は紙片を広げた。そして妙な顔をして、みどりにたずねた。

「これは、なんだね？」

クラスの全員は、それまでしんとして先生の言葉を聞いていたのだが、この質問にふたたび騒然となった。

明らかに、国語の先生は困惑していたらしい。語調をやわらげると、みどりにたずねたのだ。

「読みあげてもいいかね」

「はい」

みどりは素直に答えた。先生は紙片に目を近づけ、大きな声で読んだ。

「きょう放課後、山沢さんのことについて臨時ホームルームを開かない？　みんな気にして、授業どころじゃなかったの。……いったいこれはどういうことだね？」

先生は広一を見た。

「きょう、近くの阿倍野（あべの）団地で起きた事件のことは、わしも聞いていたが……そのことかね？」

「説明します」

広一は立ちあがった。

「ぼくはきょう、団地へもどって、山沢くんに会ってきたんです」
そのときだった。激しくドアをあけて、はいってきた人があった。
クラスのみんなが、おどろいて声をあげた。
「大谷先生！」
大谷先生は国語の先生に軽く会釈をすると、いった。
「授業のおじゃまをしてすみません」
「例の天才少年少女事件のことらしいですな」
国語の先生は、キツネにつままれたような顔でたずねた。
「大谷先生まで……いったいどうしたんです」
「うちの学校に、このクラスの山沢典夫と同じような天才少年少女っていうのかな、変わった子どもが全部で五人いたのを、ごぞんじですね？」
「知っていますよ」
と、国語の先生。
「それが？」
「消えてしまったんです！」

クラスの全員が、わけのわからぬ叫び声をあげて大谷先生にたずねた。
「それ、ほんとうですか？」
「ほんとうなのよ」
大谷先生が荒い息をついた。
「授業中に消えてしまった子もいるのよ……いま、大騒ぎになっているの……だから先生、岩田くんに山沢くんのことをきこうと思って……」
「そんな、そんなことってないわ！」
泣き声をあげたのはみどりだった。
「山沢さんまで消えてしまったっていうんですか？」
「先生だって、何がなんだかわからないのよ」
大谷先生はそれから、思い出したように国語の先生にいった。
「そう、そういえば、授業が終わったら緊急職員会議を開くという知らせがまわっていましたわ」
国語の先生が呆然と大谷先生を見つめていたときだ。
こんどは生活指導の先生がかけこんできた。

「先生！　先生！　たいへんですよ」
「まだこのうえ……」
国語の先生は、うめき声をあげた。
「たいへんなことがあるっていうんですか？」
「みんな、いなくなったそうですよ！」
生活指導の先生は、ありったけの声でわめいた。
「ええっ」
大谷先生が青い顔を向ける。
「みんなって？」
「大阪市内に住む天才少年少女の話、新聞で見たでしょう」
生活指導の先生は、同じことをくり返しているとみえて、はあはあ息をついていた。
「あの子ら、みんな、いっせいに見えなくなってしまったという連絡がはいったんです！」
もう授業どころではなかった。二年三組の一同は完全に興奮して、立ちあがり、歩

きながら、ただわあわあとさわぐだけだった。ほかの教室も同じらしい……いや、この調子では大阪市内のどの学校も、同じような状態かもしれないのだ。
そのとき、広一は、ついさっき山沢典夫のいっていたことを思い出した。
「待ってください！」
広一は教室を出ていこうとする先生がたを呼びとめた。
「ぼく、今夜山沢くんと会う約束をしているんです」
「ほんと？　それ」
いちばんさきに問いかけてきたのは、香川みどりだった。
「ほんとうなの？」
「だからそのとき、先生がたも行ってみられたらどうでしょうか」
いうべきではなかったのかもしれない。そんなことをすれば、騒ぎがますます広がることもわかっていた。しかし、先生がたの心配やみどりの態度、それにクラスメートの反応などを見ているうちに、広一はいつか、このことは自分だけのものとしておくべきではないと悟ったのだ。
この異様な事件のなぞを解く鍵は、山沢典夫に会う、ただそのことしかないのかも

しれない。とすれば、広一だけでなく、大谷先生にも行ってもらうべきではないだろうか……。
六時間目が終わると、広一はまっすぐ団地のほうへ走っていった。
先生がたの打ち合わせで、午後九時には大谷先生と校長先生だけがやってくることになっていた。それまでに夕飯をすませて、用意をしなければならない。
「待って！」
声に立ちどまると、香川みどりが追ってきていた。
「わたし、行ったらいけないかしら」
「悪いんだけど」
広一は答えた。
「大谷先生たちと相談して、ぼくだけが会うことになっているんだ」
「ひどいわ！」
みどりは、広一の胸をたたいた。
「いじわる！　どうして……」

「しかし」
ふたりがもつれあっているとき、むこうから母が走ってきて叫んだ。
「広一！　ひどいことになってきたわよ。新聞社やテレビ局の車がいっぱいやってきているわよ。広一から話を聞くんだって」
「えっ？　でも」
「じゃ、まだ聞いていなかったのね？」
母はごくりとつばをのむと、こういったのである。
「お隣の六四〇号室ね、さっき管理人の人がドアをあけたら、中に何もなかったのよ！」
「じゃ……山沢くんたちは……」
「それが……いないの。警察から帰る姿を見た人はあるんだけど……それきり行方不明なの」

すぐ目の前にそびえ立つ団地の建物を見ながら、広一は唇をかんだ。
（消えてしまったって？）
と、広一は思った。
（それじゃ、今夜九時に屋上へこいといったのは、うそだったのか？）
しかし、広一には、典夫がわざわざうそをつく必要があるとはとても思えなかった。意地っぱりでいったんいいだしたらあとへはひかない典夫のことだ。約束したらかならず守るにちがいない。
母は心配そうに、団地のほうをちらっと見た。
「うっかりもどったらたいへんよ」
母はいうのであった。
「なんだか、新聞社の人も、テレビ局の人も、まるで殺気だっているみたいなの……このままじゃ……」

「いいよ」
広一は笑った。
「ぼくはこれから家へもどるよ」
「広一！」
「母さんももどったらいい……きっとなんとかなる」
広一は決心したのだった。カメラマンや記者は、広一から話を聞くまでは、決して団地から立ち去らないであろう。何時間でも広一をつかまえようと走りまわり、団地にいすわりつづけるにちがいないのだ。
そんなことになったらどうなる？　今夜九時に、屋上へ行くために校長先生と大谷先生がやってきたら、そこで記者たちにつかまって、騒ぎはいっそう大きくなるばかりなのだ。広一自身だって、典夫と会えるかどうかわからない。どうしてもいまのうちに、新聞やテレビの人たちに帰ってもらう必要があるのだった。
広一は母とともに団地に帰ろうとして、それまでだまって横に立っていた香川みどりを振り返った。
みどりはなんにもいわなかった。唇を結び、ひとみをこらして、じっと広一の顔を

見つめているだけなのだ。活動的で快活なスポーツ選手であるみどりのそんな姿は、何かしら広一の胸にこたえるものがあった。

　ふっと広一は、典夫がやってくるまえのことを思い出した。あのころ、広一とみどりは仲がよすぎるということで、ずいぶんクラスメートにひやかされたものだ。

「香川さん」

　と、広一はいった。

　みどりの視線が下に落ちた。

「もし、なんだったら……大谷先生にたのんでみたら？」

「いいのよ」

　と、彼女は低い声でいった。

「興奮したりしてごめん……でも、わたし、やっぱりでしゃばる資格はないということに気がついたの」

　せいいっぱい、自分をおさえているいいかただった。

「わたし、たのめば、もう一度山沢さんに会えるかもしれないと思ったわ。でも、わたしがそうしたら、クラスの人もみんな同じことをいうでしょう……それじゃ先生が

たや岩田くんの迷惑になるだけ」

　顔をあげた。

「帰るわ」

　そして、髪を強く振ると、くるりと向きを変えて学校のほうへかけだしていった。

　広一はちょっとのあいだ、みどりのうしろ姿を見ていたが、すぐに向きなおった。その視線が母のそれと合った。

　母は何もいわなかった。だがその目にはどうやら自分を制し得たみどりへの賛嘆の色が浮かんでいるように、広一には思えたのである。

　エレベーターを降りると、待ちくたびれていたらしい男たちが、さっとこちらを見、つづいて走り寄ってきた。

「きみが、岩田広一くんかね？」

　と、腕章をつけたひとりがいった。

「きみ、山沢典夫くんと親しかったそうだね」

「ええ」

広一は答えた。強く記者を見返しながらいった。
「親友でした」
「その親友に何が起こったか、きみ、知らないの？」
別の男がたずねる。
「この子、まだ学校から帰ってきたばかりなんですよ！」
母が叫んだ。
「疲れているんです。そう急に矢つぎ早にいわれても……」
「いいんだよ、母さん」
広一は記者たちの前へ進み出た。たちまち人垣が輪になり、いくつもフラッシュがひらめいた。
――うそをつくことはない……広一はそう考えた。ありのままを話せばいいのだ。しかし今夜のことだけは、すんでしまうまで決してしゃべってはならない。
「山沢くんは、とても変わっていました」
広一がいいはじめると、記者たちはすぐにメモをとりだした。
「山沢くんには、できないことはなかったんです。スポーツでも学業でも、なんでもずばぬけていました」
広一は、ふと、過去形でしゃべっている自分に気がついて、ふいに悲しくなった。まるで山沢典夫が死んでしまったようではないか……。
広一のそうした気持ちが、すこしのあいだの沈黙となり、記者たちは質問を浴びせはじめた。
「どこへ行ったと思う？」
「なぜ、かれらはそんなにすぐれていたんだろうね。きみ、知らないの？」
「大阪市内の天才少年少女がいっせいに消えてしまったんだ。話によれば、きみは山沢典夫の家にも行き来していたそうじゃないか。それに、けさの事件にだって関係していたそうじゃないか」
広一は、たずねられるままに、つぎからつぎへと話しつづけた。しかし、今夜の約束のことと、それから典夫の家の中の奇妙な道具、別世界からの人間ではないかというようなことは、もらさなかった。なぜなら、そんなことをいったが最後、夜明けまで休めそうもないと思ったからである。
そんなことはすべてが終わってからでもいいのだ。記者やカメラマンには悪いが、

そうしなければ、とても解放してもらえないと感じたのである。
広一がようやく解放されたのは、七時半を過ぎてからだった。
「とにかく、妙な事件だ……ほかの子の関係からもしらべてみよう」
「どうも説明しにくいな。こいつはやっかいだぞ……いや、どうもご苦労さんでした」
男たちがどやどやとエレベーターに乗りこむのを見とどけると、広一は時計を見、急いで六四〇号室のドアをあけて、中をのぞいた。
ほんとうに、そこには何もなかった。このまえはいったときにおかれていた奇妙な道具類はむろんのこと、ありふれた冷蔵庫やガスレンジさえなくなっているのだった。わずかに残された玄関と台所の電球の光を浴びているのは、変わりばえのしない２ＤＫの公団住宅の空室でしかなかったのである。
広一は肩を落とした。ほんとうにひどく疲れていた。
「広一、晩めしを食べないかね」
いつのまに帰っていたのか、父が、空室のドアをすこしあけて、低い声で呼びかけていた。

もうお別れだ

食事が終わると、広一は壁の時計を見た。そろそろ八時半ちかい時刻である。
「もう校長先生と大谷先生が、いらっしゃるんじゃないかしら」
母がつぶやき、父はたばこに火をつけながら答えた。
「うまくいくかな？　たぶん校長先生も大谷先生も、新聞記者につかまっているんじゃないかな……よほどうまく抜け出してこないと……」
そのとき広一は突然あることに気がついた。
「ねえ、父さん……新聞記者、クラスのみんなのところへも行くだろうか？」
「そりゃ行くだろう」
父はたばこのけむりをはきだした。
「とにかくニュースになったんだからな。いじめられるのは広一だけじゃあるまい」
広一は父母を見た。
「もし、クラスのみんなのところへ行くと……」

「どうしたんだ」
「今夜のこと、きっとだれかが話すと思うんだ。そうしたら……」
「そいつはたいへんだ」
父はたばこを消した。
「広一、おまえはすぐ屋上へ出るんだ」
「あなた！」
「みんな、どっとやってくるかもしれないぞ」
父はめずらしく、いささかあわてていた。
「そのまえに屋上へ出て、外から鍵をかけるんだ。でないと」
「ぼく、行くよ！」
広一は母から鍵を受けとると、急いで靴をはき、階段をかけのぼっていった。
冷えびえとした風が、暗い屋上を流れている。ここはふつうの団地とスタイルが違って、七階建てのマンモスアパートなので、屋上は洗濯物が干せるよう、広くなっているのだ。
鍵をかけおわると、広一はため息をつき、それから金網を張りめぐらした屋上のふちへ行って下を見おろした。

見渡すかぎり灯火の海だ。遠く、北西のほうには通天閣がサーチライトを旋回させ、そこから難波方面にかけて、一面にネオンが明滅している。いつ見ても変わらない、はでな景色だった。
広一は腕時計に目を近づけ、それがもう九時ちかいのに気がつくと、金網からはなれて、下界の光にぼんやりと浮きあがっている屋上を見渡した。
まだ、何も起こりそうな気配はない。
「岩田くん」
だれか、女の人の声が呼んでいた。どうも大谷先生らしい。
広一はドアのところへ走り寄った。母に連れられて、大谷先生がやってきたのだ。
「校長先生は？」
ドアをあけながら広一がきくと、大谷先生は首を振った。
「それが……だめなのよ。例の天才少年少女のいた学校の校長先生、みんな教育委員会に呼び出されて、それに新聞社やテレビ局がうるさいの」
「先生のところへも？」

「きたわ」
大谷先生はうなずいた。
「おかげでくたくた」
そして屋上に目をやった。
「何かあった？」
「まだです」
これは母だった。
「なんだか、気持ちが悪いわ」
「いったい、これから何が起こるのかしら」
しかし、その問いに答えられる者がいるわけはなかった。三人はしばらく、風が低く流れる夜の屋上を見ていた。
「静かね」
大谷先生がぽつんとつぶやいた。それから思い出したらしくいった。
「香川さんがね」
といった。

「クラスのみんなに、今夜のこと、あすまで絶対ほかの人にいわないようにって、説得していたわよ」
広一は目をふせた。それで、だれもやってこないのか……きょうはなんだか、みどりにいろいろ教えてもらった気がする。
そのときだった。
先生と母が小さな叫び声をあげたので、広一も顔をあげ、屋上を見つめた。
ついさっきまで、風が走るのにまかせていた屋上、暗いコンクリートの物干し場に、いま、ぼんやりと、あわい燐光（りんこう）の球のようなものが見えはじめていたのである。
それは、激しく震動していた。蛍光をおびた球状の物体が、こまかく前後左右に揺れているのだ。
十数秒もたったろうか。三人が口もきけずにその物体を見ていると、やがて震動はすこしずつおとろえ、直径二メートルぐらいの球になり、蛍光を失って、音もなく屋上に着陸した。着陸してしまうと、そのすべすべした金属の表面に長方形のすじがにじみ出てきたのである。
広一は、先生や母といっしょに、それを十メートルほどはなれたドアの位置からな

がめながら、それほどおどろかない自分自身がふしぎであった。

あの球体は、おそらくこの世界のものではあるまい。あの出現のしかただって、常識をはるかにこえている……それにもかかわらず、むしろ平静な気分で観察している自分自身が、なんだか妙だった。

それはたぶん、典夫との出会いの日から目にしてきたさまざまな、現代科学では説明のつかない奇怪な現象によって、トレーニングされてきたからかもしれない。レーザーや、パラライザーや、いや、それに何より、山沢家の中にあった奇妙な道具類によって、常識をこえたあらゆるものを受け入れる気持ちになっていたらしい。

この球体だって、考えてみればほかのいろんなものと、本質的にはなんの違いもないのだ。いや潜在意識の中ではむしろ期待していたのではなかろうか。

広一がせわしなくそんな考えを追っているうちに、球体表面の長方形はますます濃くなり、やがて、すっとはしのほうに吸いとられてしまったのだ。まるでドアのような――いや、どうもドアそのものらしかった。というのは、そのぽっかりとできた穴の中から、ひとりの少年が急ぎ足で出てきたのである。

少年は――むろん、山沢典夫だった。

「岩田くん」

と、典夫は屋上を見まわすと呼んだ。

「岩田くん、いるの？」

「ここだ！」

広一は走り出た。

「ずいぶん待ったぜ」

「すまない」

典夫は広一の手を強くにぎりかえしながらそういうと、屋上のドアのほうに目をやった。

「だれだ？」

「大谷先生と、母だよ」

「そうか」

典夫は小さくうなずいた。

「みんな、ひどい騒ぎだったろう」

「山沢くん」

大谷先生が近づいてきた。
「無事だったのね……よかったわ」
典夫はそれには答えず、一分ほど、屋上から見える夜の大阪を見つめていた。まるで自分の心の中に、その風景を焼きつけておこうとでもするようだった。
「行きたくないんだが」
典夫はかすかに微笑した。
「でも、もうここともお別れだ」
「待て、山沢」
広一は一歩前へ出ると、典夫の腕をつかんだ。
「つまり……きみは、このD—15世界から……」
「そうなんだよ」
「待って、山沢くん」
先生だった。
「これはいったいどういうこと？　あなたと岩田くんとは話が通じるらしいけど、先生には」

「それは、わたしがお話しいたしましょう」
突然、ふとい声がしたので、広一たちはぎくりとして球体のほうをうかがった。そこからはいま、ひとりの男——それは典夫のお父さんだった——が、ゆっくりと出てくるところだったのである。体にはうすいしなやかな衣装をまとい、腰にはきらきら光るガラス製のような武器をつけているのだ。
「典夫がお世話になりました」
典夫のお父さんは、こちら側の三人にていねいにあいさつすると、典夫のうしろに立って、息子の肩に手をのせた。
「この子は行きたくないというんですが、でも、わたしたちは行かねばなりません」
「行くって……」
先生と母が同時にいった。
「どこへですの？」
「別の次元へです」
「…………」
「いま、ゆっくりお話ししているひまはありませんが」

お父さんは静かに、しかしよくとおる声で話しはじめた。

「わたしたちは、そうですね……次元放浪民とも呼ばれる一族なんですよ」

「次元放浪民？」

「ええ」

お父さんは、スモッグにおおわれた夜空を仰いだ。

「この世界でも、最近ぼつぼついわれているようですが、宇宙というのはひとつだけではないんですよ。限りなく重なりあい交錯しながら、同時に存在しているんです」

「…………」

「一枚の紙にかかれた絵を考えてみてください」

典夫のお父さんはいうのだった。

「そこには高さの概念はありませんね。紙を何百、何千枚重ねても、おたがいには無関係です。それぞれはふれあいながら、まったく他の存在を知りません。つまり、そこでは世界は縦と横の軸だけで成り立っているんです。平面上の点や図はすべてX軸とY軸の座標であらわすことができます……われわれの世界だって、同じようなものなんですよ。縦と横と高さの三つの軸でできるこの空間も、第四の軸のある世界から

見ると、似たようなものです」

「それは……」

「もちろん、わたしたちは四つも軸のある世界には住めません。でも、そこを通って別の世界へは移ることができます。こうして移動装置を使えばね……」

「ちょっと待ってください」

広一がたずねた。

「その第四の軸は時間でしょう？　とすればその機械は……タイム・マシンですか」

「残念ながらタイム・マシンではない」

典夫のお父さんは笑った。

「どうも時間は第五の軸らしいんだ。わたしたちはせいぜい別の次元、別の世界に移る機械しか作れなかった」

しばらく、みんなだまった。

「それで？」

大谷先生がうながした。

「次元放浪民っていうのは？」

「わたしたちはひとつの次元から別の次元、そしてまたつぎの次元へとさすらっているんですよ」
お父さんはさびしく笑った。
「わたしたちのほんとうの世界は高度に進んだ戦争によって壊滅してしまった。……わたしたちは、だから移動装置を使って別の世界へ飛んだのです」
「………」
「しかし、無限にあるいろんな地球の歴史は、すこしの進み方のずれはあっても、けっきょく全滅戦争を始める。……そのたびにわたしたちは逃げまわっているのです。平和な世界、安心して住める世界を探して……」
「戸籍は……」
母がひとりごとのようにいった。
「戸籍はどうするんです？」
「それはなんでもありません。わたしたちが手わけしてやります」
典夫のお父さんは答えた。
「本物そっくりの戸籍を、たくさん作りあげてから、役所へしのびこんで、はじめか

らあるように見せるんです。公団住宅への入居だって、そうした戸籍やいろんな証明書を作りあげて、わたしたちの何百倍かの架空の人間の名で申しこむんです。たいていは全員が入居するぐらいの数はあたりますからね……」
こうした話のあいだじゅう、典夫は、退屈そうに靴をコンクリートに打ちつけて鳴らしていたのだが、父親の話が一段落つくと、ため息をついた。
「ぼく、このつぎの世界より、ここのほうがいいんだがなあ」
典夫のその言葉で、ようやく、広一はわれに返ることができた。
この人たちを……戦争をおそれて逃げまわっている人たちを、なんとかしてここに安住させることはできないのだろうか。なるほど、いまの話は完全に常識をこえている。だが、それでもいいではないか。
いつかはここに慣れきることになるはずだ。……また、そうでなければならないのだ。
ふいに広一は、みどりのことを思い出した。
彼は唇を結ぶと、典夫たちのほうへ、一歩、進み寄った。

さようなら

典夫たちへ近寄ったものの、広一にはまだ自分自身、いったい何を話すつもりなのかわからなかった。ただ、このままでは典夫も典夫のお父さんも、いや、あのギリシャ彫刻を思わせる素朴で鋭い人々のすべてが、永久に広一たちの手のとどかないところへ行ってしまうのだということだけは、はっきり感じとっていたのだ。

「待ってくれ」

広一はいった。

「すこし、話したいことがあります……待ってください」

そのとき、もうふたりはあの金属球の中へはいろうとして向きを変えていたのだが、広一の言葉に振り返った。典夫のお父さんはふしぎそうに、典夫のほうは、はっと期待をこめた目をこちらに向けたのである。

「何か――」

「聞いてください」

広一は必死だった。このままこの人たちを去らせてはいけないのだという考えにせきたてられたので、かえってうまく言葉が出てこないのだ。

広一は顔を典夫のほうへ向けた。

（いってくれ）

と、典夫のまなざしはささやいているようだった。

（なんでもいい、この世界に残れるように、きみが父になんとか話してくれ……がんばってくれ……）

「どうしたんですか？」

典夫のお父さんが、かすかに笑いながら問いかけた。

何から話そう……広一は激しくうずを巻く自分の感情にのみこまれそうになった。目まいさえ感じるほどだった。あまりにもいいたいことが多すぎるのだ。一度にすべてはしゃべれないのに、何から話しだしていいかわからないのだ。……次元……D―15世界……次元放浪民……勇気……入居……気の毒な人たち……広一とクラスメートたち……くり返し……くり返し……。

くり返し？

そう、くり返しという単語が連想させるイメージだ。それでいいのだ。

「いわせてください」

自分の唇からもれる声が、思いのほか平静なのに気がついた広一は、どうやら自信を取りもどした。このまえ団地の廊下で、また、今夜記者たちを前にして話したあの感覚が、たちまちにしてよみがえってきた。だいじょうぶだ……と広一は思った。ぼくは、いいたいことをいおう。そうすればわかってくれる。きっとわかってくれるはずだ。

「みなさんは、これからこの世界をはなれて、新しい世界へ行くとおっしゃいました」

と、彼はつづけた。

「でも、その世界が、ほんとうにここより住みやすいという保証はあるのですか？」

「さあね」

典夫のお父さんは、うすいしなやかな衣装が風にひるがえるのを軽く押さえると、つぶやくようにいった。

「それはわからないね」

顔をあげて、大谷先生と広一の母を見た。

「でも、それはやってみなければわかりません。わたしたちはいつも未知のものに対しては、それだけの覚悟と努力を持っていなければなりません。広一くん、違うだろうか」

「…………」

広一はだまった。たしかに、そういうふうにいわれると、そこには何か広一を納得させるものが……。

違う。

どこか違うのだ。

広一はぼんやりと目を典夫に向けた。典夫はさっきから自分の父と広一のほうを交互に見ていたのだが、それでも、さっき広一が呼びとめたときにくらべると、明らかに気をおとしているようだった。どうせどうにもならないんだ、というようなあきらめの色が、その表情の中にあった。

そうだ！

広一は視線を、つと典夫のお父さんに向けなおした。

何かわかったような気がする。
「それで最後にどうなるんですか？」
突然、広一は叫びはじめていた。
「そういうふうにつぎからつぎへと別の世界に移っていって、それでおしまいにはどこか理想の世界が見つかるんですか？」
「そうありたいと願っているよ」
典夫のお父さんはうなずいた。
「いつかは、そういう世界へ移りたいと思っているし、そういうところを探しているのもほんとうだよ。でも、どんな世界だって、住んでみなければわからないのだ」
「じゃ、この世界――D―15世界ですか――だって、はじめは理想的だと考えたわけですか？」
「まあね」
「それでいいんでしょうか」
いつか広一は、こぶしをにぎりしめていた。
「ね！　理想の世界なんてものは、ほんとうにあるんでしょうか？　住む人の心持ち

しだいで、どうにでもなるんじゃないでしょうか？」
典夫のお父さんは、まったく虚をつかれたようだった。
広一はたてつづけにしゃべった。
「理想の世界なんてどこにもないんじゃないでしょうか。ぼくはそう思います。いや、そう思わないと、ぼくたちのようにこの世界でしか生きられない人間は、どうしようもないんじゃないでしょうか。典夫くんやみんなは、なまじっか次元から次元へ移れるから、より好みをしてしまうんです。そうじゃないでしょうか」
典夫のお父さんは深くうなずいた。
「きみのいうことはよくわかる……いや、いい勉強になったよ」
感動のこもった声だった。
「きみのような若い人でも、本気で毎日を過ごしていれば、それだけのことがいえる。いや実行できるんだな」
「それじゃ」
「いや、だめなんだ」
典夫のお父さんは目をとじて、ゆっくりと首を左右に振った。

「もうおそいんだよ。もう間にあわない……こっちの世界のことじゃなくて、あちらのことなんだ」

「…………」

「もうすべての手続きは終わっているんだよ、広一くん……われわれはあちらへの潜入のためにだいぶまえから工作はしていた。ここがだめだとわかったとき、われわれはいっせいに全メンバーを呼び寄せた。そのため、いろんな騒ぎがもちあがっただろうと思う」

広一は、次元放浪民の少年少女が、いっせいに消えてしまったということを思い出した。

「でも、もうみんな、あっちの人間になっているんだ」

典夫のお父さんはうなずいてみせた。

「この服は、あちらの世界のものなんだ……もういまから、もとにはもどれないんだよ」

「そうですか」

どうにもならないのか……すでにそこまで事態は進んでいたのか……広一にはどう

することもできないのだろうか……。

典夫たちふたりと、広一たち三人は、しばらく向かいあったまま、どちらも口をきかなかった。暗い屋上を刃物のように流れるサーチライトの光も、遠く旋回し明滅するネオンも、ひどくはるかなもののようだった。

夜がふけてきたのか、風はしだいに冷えはじめていた。

この夜を、ぼくは一生忘れないかもしれない……と広一は思った。

おそらく、典夫も同じにちがいない。

あの初めて典夫に会った日や、雨の放課後や、運動会の光景が、広一の頭の中をはなやかにかすめ、一瞬、虹のような記憶となると、ふたたび沈みこんでいった。それにかわって、広一はまた香川みどりのことを思い出した。

「さようなら」

典夫のお父さんがつぶやいた。そして向きを変えると、例の金属球の中へはいろうとした。

「もうたくさんだ！」

ふいに典夫が、お父さんの服をつかむと、叫び声をあげた。

「典夫！」
「もういやだ……」
典夫はあいたほうの手の甲で顔を乱暴にこすると、泣きそうな声になった。
「ぼくはもう、これで何回も何回もいろいろな世界をめぐってきた。でも、もういやだ。もうたくさんだ！　ぼくにやっと友人ができたというのに……また……」
典夫は天を仰いだ。
「こんなことってあるものか……こんな……これで何年も何年も」
「典夫、やめなさい」
典夫のお父さんが静かにいった。
「あきらめるんだ典夫。われわれは次元放浪民なんだ。もう帰ってゆくところはない……宿命なんだ」
ようやく典夫は、自分をおさえることに成功したらしかった。しばらく広一たちのほうを見ていたが、つぎの瞬間、身をひるがえして金属球の中へとびこんだのである。
だが典夫はすぐに出てきた。彼は走ってくると、広一の手に、小さな、しかし重い

ものを押しつけたのである。
「これ、持っていてくれ」
と、典夫は早口にいうのだった。
「レーザーだ」
「えっ？」
「捨てるなら捨ててくれてもいい……でも、ぼくがこの世界に心を残しているという、証拠を見せておきたいんだ……そうしたら、そうしたら……」
「…………」
「また、ここへもどってきたときに、仲間に入れてくれるだろうね？」
「もどって？」
「典夫！」
お父さんが呼んだ。
「もう時間がないぞ」
沈黙。
「ぼくはこれからまた、催眠学習で新しい世界の言葉を学ばなきゃならない」

典夫は低い声でいった。
「でも、この世界のことはいつまでも忘れない……十年か、二十年か、それとも五十年後か、いつかはもどってくる……そう考えて一生を送るつもりだよ。もどってこられなくっても、そう思っていたいんだよ」
「山沢……」
「じゃ」
典夫は無理に微笑した。
「さようなら」
金属球のほうに歩みかけたが、ふと首だけをこちらに向けた。
「香川さんによろしくね」
声を残すと、典夫はお父さんにつづいて金属球の中にはいった。みるみるそのつぎ目が消えてゆき、激しく震動するのを、広一たちは呆然と見つめていた。
……知っていたのだ、と広一は考えていた。典夫は、みどりが彼に好意を寄せていたのを、ちゃんと知っていたのだ。人の愛情とか好意とかいうものには極度に敏感な典夫が、そのことを知っていないはずはなかったのだ……。

広一はふと、嫉妬を感じたが、しかし、それが典夫に向けたものか、みどりに向けたものか……いや、おそらくはその両方に向けられたものとしか、彼には思えなかった。
「……消えたわ」
つぶやくように母がいい、つづいて大谷先生が、ため息をつくのが聞こえた。
しかし、広一は振り返らなかった。金属球のあったコンクリートの屋上や、そのはての金網や、さらには遠く広がる大阪の灯火を、放心したように見つめていた。だれにも告げようのないむなしさ、敗北感に似たものにかわって、感慨が彼をつつみはじめていたのである。いつのまにか視界がゆがみ、にじみはじめていたのを、だれにも知られたくなかったのである。

みどりの悲しみ

事件の翌日から、人々の動きはさらに激しくなった。校長先生やその他の先生がただけでなく、大阪市内の、消えた生徒たちと多少でも関係のあった父兄は、マスコミ

に、いつまでも追いまわされた。

多くの新聞や雑誌が、この奇妙な事件のことを書きたて、学者や文化人までが、その原因について論じていたのである。

だから、広一たちもいつになったらおちついた生活にもどれるのか、まったく予測さえできなかった。根掘り葉掘りその夜のことをたずねられて、すっかり気鬱（きうつ）になってしまったほどである。いつまでもかくしておけるものではない。どんなにかくしたところで、いつかはクラスメートの口から、あの夜のことはもれるだろうと判断した大谷先生たちは、思いきって広一が学校でそのことを話したほうがいいだろうと、すすめたのであった。

広一の報告は、クラスじゅうにすごい反響を起こしたのはもちろん、そのために、それから何日も、いろんな人々が阿南中学へやってくるようになった。

典夫のお父さんのいったことについても、いろんな人々が憶測（おくそく）を並べたてた。一部の人々は肯定し、いままでのわれわれの常識というものが、どれだけかたよっていたかを論証しようとしたが、他の大多数の人々は、そんなことはあり得ないという見地から、広一たちがうそをいっているか、それでなければ幻覚によるものだと考えた。

しかし広一はもう、そうした大人たちの動きに逆らう気はなかった。ひとつにはそんなことをしてもどうにもならないと思ったからであり、もうひとつはクラスメートのことが心配だったからである。これ以上さらにさわぎたてることは、阿南中学がいつまでたってもふだんの状態にならないので、ろくに勉強もできず、生徒たちの心をさわがすだけだということに、彼は気がついたのであった。

「したいように、させておけばいいのさ」

と、広一の父はいうのであった。

「どうせマスコミなんて、あきっぽいんだ。そのうちにすっかり忘れてしまう……それまで待てばいいんだよ。何もこっちから、広一自身、うずの中に巻きこまれるような真似をしなくてもいいんだ」

たしかにそのとおりであった。一日ごとに騒ぎはおさまってゆき、一ヵ月ちかくたったころには、直接事件にかかわりのあった人々をのぞいては、ほとんどうわささえされないようになってしまっていた。いや、クラスメートでさえも、なるべくそのことにふれないようにした結果、いつか典夫のことも、それぞれの心には残っていながら、たいした問題とはならなくなってしまったのである。つまり、典夫たちは、突然

転校してその日から騒ぎを起こしたと同じように、騒ぎとともに消えてしまい、その存在はいつのまにかクラスメートの記憶の中のものだけになってしまっていたのである。

だが広一は知っていた。ただひとり、どうしても典夫のことを忘れられない人間がクラスにいるのを。……それは、いうまでもなく香川みどりであった。

教壇に立った国語の先生が、手にテストのたばを持っているのを見て、クラスのみんなは静かになった。

「これから、このあいだのテストを返す」

と、国語の先生は大声でいった。

「例の事件のせいか、こんどはずいぶん成績が悪い。この三組の平均点は四十七点だ……八十点以上は三人しかいない。こんなことでは困るぞ。こんどの期末テストには、もっとがんばるんだな」

それから、ひとりひとり名を呼んで、テストを返しはじめた。

広一の成績も、いつもよりはるかに悪かった。

「岩田、きみまでがこんなことじゃいかんな」

と、先生は小さな声でいった。

「八十三点じゃ、学年で十番以下だぞ」

広一はだまって頭をさげると、テストを受けとって、机にもどってきた。

（でもまあいいさ）

と、広一は思った。

（こんどはもっとがんばればいい。……それに、国語はどうせ、みどりがいつでもトップなんだ。八十三点もあればいいと思わなくちゃ）

ちらりと目をあげたとき、ぼんやりと自分の席にもどってくるみどりの姿が見えた。

「どうだった？」

広一がたずねても、みどりは返事もしなかった。だまって席につくと、テストを一度広げてから、ゆっくりとたたみはじめた。

そのとき、広一はつい、みどりの点を見てしまったのだ。……六十一点。

（まさか！）

と、広一は思った。

（あの国語が得意なみどりが……）

そういえば、近ごろの香川みどりには、一時の生彩はまったくないといってよかった。快活さが影をひそめたのはもちろんのこと、体育の時間でもさっぱり元気がなく、授業中に名ざしされても、答えられないときのほうが多かったのである。

あのとき、典夫のいったことを、広一はそのまま、みどりに伝えたのだが、それがかえっていけなかったのかもしれない。あれ以後のみどりは、まるで人が変わったようであった。

「香川さん！」

広一は、小さな声でみどりを呼んだ。

「香川さん！」

みどりはちらっと白い顔を広一に向けたが、すぐに目をふせて、かすかに首を横に振ってみせた。言葉を返すのが、ひどくめんどうだといったふうなのだ。

やはりまだ、典夫のことを考えているのだろうか……と、広一は考えるほかはなかった。このままではみどりにとって、あまりにも残酷なことになる……いくら待っても、もう決して典夫は帰ってこないだろう。それがわかっているだけに、いっそうみどりがあわれであった。

だが、広一にはどうしようもなかった。だまって見ているほかに、いったい何ができたというのだ。

なんということだ

いつか、カレンダーがひらめき飛び去るような三学期が始まっていた。きびしく、不安や緊張に満ち、なおかつどことなく甘さをおびたシーズンを、広一は毎朝、アスファルトに凍りついた打ち水をふみながら、早朝補習に通いつづけていた。

広一たちの阿南中学は、例年、すぐ近くにある北畠（きたばたけ）高校への進学者数がいちばん多いことでも有名であったから、生徒たちはいまさら先生にいわれなくても、おたがいにそうとうな競争心を燃やしてがんばる。

それが三年進級を間近にひかえた三学期ともなれば、いささかきびしい空気が感じられないこともない。早朝の補習にも半数以上出席するのが、毎年の例だった。

校門をはいったとき広一は、バッグをさげ、うつむきかげんに歩いていく女生徒の姿を認めた。

みどりだった。

「おはよう！」

声をかけて追いついた広一は、相手の顔の色がさえないのに気がついた。

「ひさしぶりだね」

「……ええ」

なんとなくちぐはぐな感じのまま、ふたりは肩を並べて、補習の行われる教室のドアをあけた。

時間が早いので、まだだれもきていない……いや、教壇のすぐ前の席に、ひとりの少年が、ぼろぼろの服を身にまとい、頭をかかえてすわりこんでいる。

みどりが何かわけのわからぬ声をあげた。広一も手にしていたバッグをほうりだすと、いっしょに教壇のほうへかけ寄った。

なんということだ……こんな……しかし、彼は大声でわめいた。

「どうしたんだ！」

みどりも叫んでいた。

「山沢さん！」

ぼろぼろの、あちこち焼けこげた服をまとった山沢典夫は、顔を起こすと、ゆっくりと振り返った。

すきとおるような美貌に、この世のものとは思えない複雑な微笑が浮かんでいるのを、広一は見てとった。

帰ってきたのね

広一とみどりがかけつけたとき、もう山沢典夫は立ちあがっていた。なんとも形容のしようがない弱々しい表情を浮かべ、手をのばそうとしたが——たちまち床に倒れふしたのである。

「山沢！」

「しっかり！」

ふたりは典夫を両側から助けおこした。すると典夫は、ぼんやりと目を開いてこう

つぶやいたのである。
「ヤマザワ……ノリオか」
「なんだって？」
「そうだ」
典夫は宙を見つめ、微笑を浮かべた。
「ぼくはまた……山沢典夫にもどれたんだな……」
そしてふたたび目をとじると、ぐったりと手足をたらしたのだ。
「山沢さん！」
みどりが悲鳴をあげた。が、広一のほうは、典夫の鼻に手を近づけてからいった。
「だいじょうぶ……気を失っているだけだ。それよりも、すぐ保健室へ運ぼう」
「え？」
呆然と広一を見つめていたみどりは、数秒ののちにやっとわれに返ったか、大きくうなずいた。
「そうだわ……そうしましょう」
ふたりでささえあげてみると、いまさらながら典夫の姿は痛々しかった。服には焼

けこげや裂け目がいたるところにあるし、体にも何ヵ所も傷ができている。しかし、それにもかかわらず血の気を失った典夫の顔は、大理石の彫刻のように繊細で気品に満ちていた。
「帰ってきたのね」
と、みどりはつぶやきつづけていた。
「山沢さん……やっぱり帰ってきてくれたのね」
だが広一のほうは、どうして山沢典夫がこの世界にもどってきたのか……いや、なぜ典夫だけがもどってきたのか……それに、このひどいようすはなんのせいなのか、それを考えようとしていた。考えれば考えるほどわけがわからなくなってくるのも、またたしかなことではあったが……。
「まあっ、どうしたの？」
保健室に通じる廊下まできたとき、広一たちはばったりと、登校してきたばかりの大谷先生に出くわした。
「まさか」
と、先生は口を半分あけたまま、典夫を凝視した。

「これは……いえ、そんなことあるはずがない……まさか、山沢くんでは……」
「山沢典夫さんです」
みどりがしっかりした声で答えた。ついいままで混乱し、あわてていたのに、いまではずっとおちついていた。
「保健室へ行こうと思うんですが……」
「どこに……」
大谷先生は、からからにかわいた声でたずねた。
「どこにいたの？　それにその服は……」
いいかけたが、すぐにそれを中断すると、いつもの大谷先生らしい、てきぱきとした調子で指示を始めた。
「保健室の鍵はあいていると思うわ……それから、校医さんへの連絡は先生がしましょう。あなたがたは、とりあえず山沢くんをベッドに寝かせてあげなさい」
「はい」
みどりはうなずくと、広一に目で合図をして、また典夫の片腕をにぎり、肩を貸したまま歩きだした。

広一はみどりといっしょに保健室にはいりながら、新しい驚きに打たれていた。それはみどりの態度についてであった。きのうまで、いやついさっきまで、ぜんぜん生彩のなかったみどりは、ふたたびあの断定的で頭の回転のいい、さえた少女に立ち返っている……その心理は広一にもわかるような気がしたが、しかしこう現実に見せつけられてみると、やはり戸惑いをおぼえるのだった。
「さ、岩田くん、水を入れてきてよ」
みどりは典夫を寝かしつけると、こんどはガスストーブに火をつけ、それから広一にヤカンを押しつけた。
「お医者さんがきたら、きっとお湯がいるんだから」
そのとき、重いため息とともに、典夫が目をあけたのである。
「気がついた？」
みどりがたずね、典夫はかすかにうなずいてみせた。
「すぐ先生がたや、校医さんがくるぞ」
「しっかりしてね」
典夫のほおに血がさしてきた。朝日を浴びるバラのようだな……広一は考えた。な

んだかとても幸福そうにさえ見える。
「ここは……保健室だな？」
かすかな声で典夫はいった。
「そうか……やっぱり助かったんだな」
「どういう意味だ？」
思わず広一は反問した。
「いったい何が起こったんだ？」
「だめよ！　岩田くん、まだそんなことたずねちゃ」
みどりが激しくさえぎったが、典夫はゆっくり手を振って、いった。
「いいんだ……いわせてくれ」
ふたりはだまった。
「ぼくは……いや、ぼくたちは」
と、典夫は小さな声でいいはじめた。
「D―26世界へ行った……」
ふたりはうなずいた。そろそろ補習が始まっているとみえて、校舎からは生徒たち

のざわめきが聞こえてきたが、もうそれどころではなかったのだ。
「だがな……」
典夫は唇をかんだ。笑おうとしているらしいが、それはどう見ても不自然な表情にしかならなかった。
「だが……次元放浪民なんて……ぼくたちだけじゃなかったんだ」
「はは」と、典夫は声をたてて笑った。
「ぼくたちだけが次元放浪民だなどと考えていたのは、たいへんなまちがいだった……ぼくたちはD―26世界で、ほかにも放浪民がいることを知った……」
苦しげないい方だった。
「ほかの放浪民たちは、ぼくたちよりずっとまえに、何万人も到着していたんだ」
「…………」
「ところがD―26世界の人たちは、そうした次元放浪民などを受け入れることはできないと考えていたんだ……どんな放浪民であろうと、自分たちの中に入れることを決して許さなかった……」
「…………」

「何が起こったと思う」

典夫は歯をくいしばった。目からは涙があふれて落ちた。

「D―26世界の人たちは、ぼくらが到着しおわるのを待って、〝人間狩り〟を始めたんだ……たしかにD―26世界には戦争はなかった……でも、ないのがあたりまえだ！　そこの人々は、まるで人間が猛獣狩りをするのと同じように、次元放浪民を見つけては狩りたてることで、闘争本能を満足させていたんだ！」

広一には典夫の話のすべてはわからなかったが、典夫たちが一種のえじきにされたらしいことは、悟ることができた。

「ぼくたちは追われた……みんな、ちりぢりばらばらになって……撃たれた……石を投げられ、捕らえられて手や足を……」

「やめて！」

ふいにみどりが、耳を押さえた。

「やめてやめてやめて！」

「そう」

声がした。

「そんな話はあとにしたほうがいいと思うな……まず山沢くんの体がさきじゃない？」

それは、いつのまにか保健室の入り口に立っていた大谷先生だった。

「校医さんもこられたし……」

そういえば大谷先生のうしろには、校医と、ふたりの先生がいて、しきりにこちらをのぞきこんでいるのだった。

「さあ……あなたがた、補習でしょう？」

大谷先生はまたいった。

「あとはこちらにまかせなさい」

広一がうなずこうとしたときだった。だしぬけに典夫が、上半身を起こしたのである。

「………」

典夫はいま初めて気がついたように、ぼんやりとみんなの顔を見まわしていた。その表情にみるみる絶望の色がかぶさってゆくのを、広一は見てとった。

「そうなのか」

とてもさびしい声だった。

「やっぱり……そうなのか……ここへ帰ってきたのは……ぼくだけだったのか」

全員が凍りついたように、その場につっ立っていた。

典夫が何をいおうとしているのか、広一にはピンときた。典夫は、自分の仲間を、いや家族のことをいっているのだ……典夫の父や母や……。

典夫はうつむいて、顔を両手でおおった。

「ああ……」

と、声がもれた。

「ぼくはひとりぼっちになってしまった」

「違うわ！」

かん高くみどりが叫んだ。

「いいえ違うわ……あなたはひとりぼっちじゃない……みんないるわ……クラスのみんなや、岩田くんや、それに」

ほおがさっと赤くなった。

「わたしだって……」

「どうしたらいいんだ？」

典夫はくやし泣きに似た声をあげた。

「ぼくには、なぜふつうの人のような生活が与えられないんだ？　ぼくは……」

「しっかりして」

みどりは典夫のベッドのそばへかけ寄った。

「負けないで……ね、すぐにお父さんもお母さんも見つかるわ……しっかりして。元気を出すのよ、典夫さん！」

大谷先生があっという表情を浮かべたのに広一は気がついた。そう、たしかにみどりは山沢さんといわず、典夫さんといったのだ。

だが、そのことに気づいたのは、大谷先生と広一のふたりだけだった。先生はちらっと広一を見ると、やさしくみどりの肩に手をおいた。

「いまはおよしなさい」

先生はやわらかくいった。

「山沢くんはとても興奮しているわ……校医さんにまかせて、ほかの人は出ましょう、ね？」

みどりはひとつ深くうなずいた。そして頭をたれたまま、自分がいちばん先になって保健室を出ていった。

最後に出る広一がベッドを見たとき、典夫は疲れきったのか、ぐったりとなった腕を校医の注射針にまかせていた。

どうして典夫を守るか

一時間目は大谷先生の理科の時間だったが、いつもの先生らしくもなく、なかなか教室にやってこなかった。

しかし、もし先生がきたとしても、とても授業ができるような雰囲気ではなかったこともたしかである。いつのまにか、うわさはうわさをよんで、学校じゅうが典夫の話でもちきりだったのだ。まして典夫の属していた二年三組にいたっては、それこそ、ハチの巣をつついたような騒ぎがつづいていた。

「山沢がもどってきたんだって？」

「いま、保健室にいるそうよ」

「いったい、どうしたんだろう」

「知るもんですか」

クラスのだれもかれもが、てんでに憶測しながら話しあっている。ことに、実際に典夫を保健室にかつぎこんだ広一とみどりは、十数人のクラスメートに囲まれて、動くに動けないような状態であった。

「で、どうなっているの？」

ひとりの女生徒がたずねた。

「服もぼろぼろだなんて……いったい、何が起こったの？」

「ほかの次元でいためつけられたらしいな」

と、またひとりがいった。

「どうしてそんな目にあったんだろう」

「異次元のこと、きいた？」

わあわあわあ。

広一はマシンガンのようにつぎつぎと浴びせられる質問に答えながら、ふと隣の香川みどりを見た。クラスメートたちの問いに応じてはいるものの、必要以上のことは

決してしゃべろうとせず、声がとだえると、ふっと考えこむような目になる。こんな騒ぎの中心にはいたくない……できればひとりで考えごとをしたいというふうだった。

　十五分もたったころ、ようやく教室の前のほうのドアがガラガラと開かれた。大谷先生だった。きっと典夫のことについて、いろんな打ち合わせをしてきたのにちがいない。みんなはどっと立ちあがると教壇に殺到した。

「先生！　どうなんですか？」

「どうなっているんですか？」

「だまって」

と、先生は両手をひろげた。

「すわりなさい……すわるのよ！」

先生の気勢に打たれて、みんなはぞろぞろと席についた。しだいに教室の中は静まっていった。

だが、それは先生の発言を待ちかまえ、期待している静けさであった。みんなは固唾をのんで、先生の言葉を待っていた。

大谷先生は、しかしだまって教科書を取りあげると、クラスを見渡していったのである。

「きょうは細胞組織のところをやりましょう」

一瞬にして教室の静けさは破れた。何人かが立ちあがるか手をあげるかして、先生に叫んでいた。

「山沢くんのこと、教えてください！」

「こんなんじゃ、勉強だって頭にはいりませんよ！」

先生は教科書をおき、まず広一に、ついでみどりに視線を向けた。それからクラス全体を見まわすと、いたずらっぽい顔をしたのだ。

「気になる？」

「当然ですよ！」

声が乱れとんだ。

先生はにっこりした。

「そう……じゃ話すわ」

腕をうしろに組むと、教壇を歩きはじめた。

「いままで職員会議があったんだけれど、とにかく、問題は複雑なのよ……まず山沢くんは、この学校の生徒かどうかということから始めなくちゃならないんだし」

がやがやという声を制すると、先生は説明をつづけた。

「なんにしても、あの行方不明になった人たち全員、いまじゃ籍があるかどうかさえはっきりしていないわ……戸籍だって住民登録だって、学籍簿だって、まだ書類上は残っているけど、ほんとうは作られたものだということがわかっているでしょ？　もしいま山沢くんたちがみんなもどってきたら、またまたたいへんな騒ぎになるでしょうし」

「先生！」

みどりがすっと立ちあがっていた。

「先生！　どうしてそんないい方をなさるんですか？　あんまり冷たいじゃありませんか。わたしたち、いまでも山沢くんはクラスメートだと思っています！」

そうだそうだ、という声がつづいた。

先生はうなずきながらみどりの言葉を聞いていたが、ふたたび教壇の上を歩きはじめた。

「みんなのいうことは、よくわかるつもりよ」

と、先生は低くいった。

「でもこれが社会常識というものよ。感情や理屈だけで動くまえに、まず社会に対する判断が必要なの」

「むちゃです」

広一さえ、たまりかねて叫んだ。

「先生がそんなことをおっしゃるとは思いませんでした」

大谷先生は背筋をのばし、広一の発言にはかまわずつづけた。

「それだけのことをまず考えてから、対策を考えなければいけなかったのよ……だから時間がかかったの……どうせ間もなく、まえのようにマスコミの人がどっとやってくるでしょうね……だから職員会議で、わたしたちはどうして山沢くんを守るか、それを考えなければならなかったの」

なんだ……と広一は思った。はじめからそういってくれればいいのに、あんないい方をするとは先生も人が悪い……どうやらクラスの全員が同じことを考えて安心したらしかった。

「それに、まず山沢くんを病院へ入れなくちゃならなかった……山沢くんはいまのところひとりぼっちだから、いちおう先生が保証人ということになって、ついさっき、近くの府立病院へ入院させてきたのよ……ずいぶんひどいけがをしているけれども、二日もすればずっとよくなるだろうって」
先生は教科書を取りあげた。
「そして、あさってぐらいまでは面会謝絶ということにしてもらっているから——まあ半分はマスコミを避けるためだけど——そのあとでみんなで見舞いにいくといいわね。さあ教科書を開きなさい。これで満足したでしょう？」
みんなは教科書を開いた。先生はいつもとまったく変わりのない調子で授業をつづけていった。

屋上から降りてくる

「どうやら、またしばらくマスコミに追いまわされそうじゃないか」
晩ごはんのあと、父が読みかけの雑誌をおくと笑った。

「まるで、有名人並みだな」
「わたしも広一から聞いたり、ニュースを見たりしたんだけど」
母が心配そうな声を出した。
「まるで、夢のような話だわね」
「おいおい、母さんまでがそんなことといっちゃ困るな」
父がひやかした。
「母さんはなんといっても、まえの消失事件のときの、〝目撃者〟なんだぞ」
「でも……」
「なんにしろ、やっかいなことだ」
父は首をのばして広一を見た。
「なあ広一、覚悟はできてるかい」
広一は肩をすくめたが、ふと顔をあげていった。
「そういえば……お隣にはもう別の人が引っ越してきていたね？」
「そう……先月だったかしらね」
と、母。

「どうかしたの？」
「じゃ、山沢の家は、いま、ないわけだ」
広一はほおづえをついた。
「あいつ、どこに住むんだろう」
「でもお気の毒ねえ」
母がつぶやいた。
「お父さんも、お母さんも行方不明だなんて……」
広一はいすにすわったまま、ぼんやりと典夫のことを考えていた。まったく、なんということだろう……別の次元へ行ったはずが、そこで迫害されてちりぢりになってしまうなんて……こんなことは予想もしなかったのに。
「おい」
低い声で父がいっていた。
「なあ、だれかきたんじゃないか？」
広一は、はっと目を外へ向けた。
「新聞記者かしら」

母がすばやく応じ、すっと台所のほうへ近づいた。
外のざわめきはだんだんと大きくなっていく。それも、ひとりやふたりではない、十人、いや、何十人もの人々が、がやがやと話しあっているような気配だった。
広一たちは息をつめた。またマスコミに追われるのか……。だが、その人々はただ話しあっているだけで、いつまでたっても広一の家のブザーを押そうとはしなかった。
「おかしいわね」
台所で耳をすましていた母がいった。
「屋上から、あとからあとから人が降りてくるようだわ」
屋上？　広一と父は目を見合わせた。もしや？　という感じをいだいたまま、広一は玄関へ走っていき、のぞき窓のカーテンを持ちあげてみた。
外の廊下は、人でいっぱいだった。老人や少年少女、男や女……いずれもぼろぼろの服をまとって、ひしめいているのだ。その人々の中に、たしかに典夫のお父さんとおぼしき姿を認めた広一は、つぎの瞬間ドアの錠をあけると廊下にとび出していた。

帰ってきた人々

広一が走り出てくる気配に、六四〇号室の前に群がった人々は、どっと振り返った。

「山沢くんのお父さんじゃありませんか！」

広一は叫んだ。

「いったい、どうしたっていうんです！」

顔も手もよごれ、ぼろぼろの服をまとった人々の中から、典夫のお父さんが電撃を受けたように顔をあげた。

「きみは、岩田くん！」

典夫のお父さんは、かけ寄ると、広一の肩を両手で強く押さえた。

「典夫は？　典夫がこっちへ帰ってきてはいませんか？」

頭をさげた。

「教えてください……わたしたちはやっとのことでここへ逃げてきたんです。みんなばらばらになって……でも、典夫が逃げるならここしかないと思って、この人たちといっしょに、D―15世界へもどってきたんです。教えてください！」

なんともいいようのない安堵感が、怒濤のように広一の胸に流れこんできた。

(よかった)

――広一は、しっかりと典夫のお父さんの顔を見ると叫んだのである。

「典夫くんは、ひと足さきに帰っていますよ！　いま、府立病院に収容されているはずです」

期せずして歓声があがった。典夫のお父さんは、必死で涙をこらえようとしているふうだったが、とうとうたまりかねて、腕で顔を乱暴にぬぐった。その肩へ、典夫のお母さんが顔を寄せた。

「どうだ、いったとおりだろう」

典夫のお父さんはみんなに叫びかけた。

「D―15世界だ。ここなら、みんな、なんとかやってゆけるぞ！」

それから、広一にはわからない言葉で、早口にしゃべりたてた。なんの意味かはわからなかったが、広一には、それがD―26世界の言葉だろうと想像できた。

「府立病院って、あの、ここから南へ行った病院ですね？」
ようやくわれに返ったらしいお父さんは、広一にいった。
「すぐに行ってやりたいと思います」
そのとき、ドアが開いて、広一の父が現れた。
「広一、どうしたんだ？」
それから目をあげて、典夫のお父さんを認めた。
「典夫くんのお父さんですね？」
父は歩み寄って手をさしだした。
「息子からいろいろ話を聞いています。たいへんな目にあわれたようで」
「ありがとう……ありがとう」
典夫のお父さんは、手をにぎりかえしながら何度も頭をさげた。
「ほんとに、わたしたちは愚かでした。いつも最上のものを求めてさまよっていた結果がこれです。おはずかしい」
「すぐに病院に行かれたほうがいいでしょう」
父はそういって、ほかの人々を見まわした。

「この人たちは？」
「わたしたちといっしょに逃げてきた次元放浪民たちです。わたしたちと同じ仲間の者もいるし、D—26世界で初めて出会った人もいますが、みんな〝人間狩り〟に追いたてられて逃げてきた人々です」
そのころには、もう騒ぎを聞きつけたのか、廊下には、首を出したり、こっちを見たりする人がふえていた。広一の父は、そうしたようすをすばやく見てとると、
「あなたがたは、すぐに府立病院に行かれたらいいでしょう。広一と家内に案内させます。それから、ほかの人たちは……そうですな、さしあたって、今夜の寝場所もないわけですな……。よろしい、わたしにまかせてください。心あたりがありますから」
「でも……」
「くわしい話は、おちついてからでけっこう」
父は笑ってみせた。
「それよりも、まずゆっくりと休息することですよ。どうせ警察やマスコミが殺到するでしょうから、それまでに体力をつけておくべきですな」

広一は、力強く指示している父を誇らしく思った。

あしたを創る（つく）

病院の面会時間はまだ終わっていなかった。広一たちは受付で病室番号を聞くと、すぐに階段をのぼっていった。だれも口をきかないので、四人の足音は夜の廊下に大きくひびいた。

「ここだ」

広一たちが立ちどまったとき、そのドアのむこうでつづいていたらしい低い話し声がやんだ。

（だれかきているのかな？）

広一が思ったとき、ドアは内側からそっとあけられた。

「あっ、大谷先生！」

「岩田くん？」

先生はそういい、視線を広一の後方にうつすと、一瞬信じられないような表情にな

り、たちまち驚きの声をあげた。

「これは、山沢くんのお父さん！　それにお母さんですね？」

その声で女の子が顔を見せた。香川みどりだった。みどりは事情をすぐに察したらしく、パッと顔を輝かせた。

そのとき、すでに典夫のお父さんとお母さんは病室に走りこんでいた。

広一と母がそれにつづいた。

ベッドに半身を起こした典夫は、大きく目をみはったまま、何もいおうとはしなかった。

が、つぎの瞬間、典夫たちは強く抱きあっていたのである。

「よかった、よかった」

大谷先生がうわごとのようにつぶやきつづけている。広一はなんだか、ひざの力がすっと抜けていくように思った。あまりにすべてが、うまくいきすぎたような感じだった。

母がそっと広一に目くばせした。それは、これ以上典夫たちのじゃまをせずに帰ろうという合図だった。

そうした空気を、大谷先生も察したのだろう、みどりに何かいおうとしたときである。

「待ってください！」

それは、典夫のお父さんだった。

「お願いですから、もうすこしいてくれませんか？　わたしたちは、もう自分たちだけの生活にとじこもっているつもりはありません。みんなといっしょにやってゆかなければ、ほんとうの生き方はないということに、やっと気がついたんです。……どうか、すわってください。いま、みなさんに行かれてしまうと、わたしたちはとてもさびしい思いをしなければなりません！」

「ほんとうだ！」

朝とくらべると、すっかり元気になった典夫もいった。まだ体のあちこちに包帯をしているが、声はふだんの典夫と変わらなかった。

「みんな、帰らないでくれ！」

(あいかわらずわがままなヤツだ)

――広一はふとそう思ったが、ふしぎに腹はたたなかった。それよりも逆に、何か

温かいものを典夫の言葉に感じとったのである。

「いや、振り返ってみると、わたしたちはずいぶん多くの世界を見てきました」

典夫のお父さんがいった。

「そう……ほんとうにさまざまです。同時に存在しながら別の時空系列にはいっているせいか、あるいは時間自体の屈曲（くっきょく）、歴史の違いなどが、もともと同じ人間を、あんなふうに変えてしまうのでしょうか……。とにかく、極度に発達した世界や、動物たちと共存共栄している人たち、また、いまやっと鉄の時代にはいろうとしている社会など、さまざまです」

病室のほの暗い光の中で、典夫のお父さんはしみじみと話した。

「しかし、どの社会もゆっくりと、あるいは急速に、科学の時代にはいってゆく……。もちろん、なかにはついに科学時代にさえも達しないところもあるのですが……しかし考えてみるとわれわれは、そうした時代には住めないんです」

やわらかな微笑がほおに浮かんだ。

「なぜなら、わたしたちはすでに科学の成果による文明というものを知った。それに

慣れてしまったんです。いまさら科学のない時代にもどろうとしたところで、身についた習慣や考え方は、決してもとにはもどりません。たとえそれがエデンの園のようなところでも、きっと辛抱できないでしょう。しかたのないことです。わたしたちのしなければならないのは、時代を逆行させたり、逃げまわったりすることではなく、勇気を持って未来に立ち向かい、わたしたち自身のための未来を創りあげること。最終戦争の恐怖におびえるまえに、なんとかしてみんなで最終戦争が起こらないよう、力を合わせること……これだったんですね。いや、そうでなければならないんです」

　みんな、典夫のお父さんの言葉に聞き入っていた。

「もちろんこの世界にもいろんな矛盾やとんでもないことがたくさんありますよ。それに、ともするとわたしたちの未来は真っ暗のように思えることがあるのも、ほんとうのことです。でもね、みんなそれでもがんばっている。なんとかして自分たちの手でよい未来を創ろうとして生きている……。この岩田くんのようにね。これですよ。これがあるかぎり、この世界はだいじょうぶです。いや、そうじゃない、わたしたちもそうして生きなければならないんです。負けないで、みんなで手を取りあってやりぬくこと。自分たちに与えられた問題に全力で立ち向かうファイトを失わないこと、

これですよ。……わたしたちはここに永住したいと思います」

「ほんとうですか？」

　みどりがうれしそうに声をあげた。だれの顔も輝いているようだった。あかりこそ暗かったが、このときみんなの表情には、この世の中で、なんとかして自分たちの手で未来を創りだそうという意志と希望が、浮かんでいたのである。

「あら、だれかきたわ」

　広一の母がいったとき、病室のドアが静かにあけられた。

　父だった。オーバーを着こみ、肩を丸めてはいってくると、すぐにいった。

「やあ、みなさん」

　そして典夫のお父さんに告げた。

「みんな、上本町の、会社の関係の寮に泊まってもらいました。門限は十時ですから、もうほかの人はだれもはいれません。あすの朝まで、マスコミにつかまることもないでしょう」

「十時ですって？」

　奇声をあげたのはみどりである。

「たいへんだわ。もうそんな時間なの？」
「心配しなくてもいいわよ」
大谷先生がみどりの肩に手をかけた。
「先生が送っていってあげるわ」
「それじゃ……」
広一たちは立ちあがった。が、窓ぎわのベッドの典夫がふいに大きな声をあげたので、立ちどまった。
「雪だよ！」
窓の外をゆびさしながら、典夫は子どものようにはしゃいでいた。
「雪だ！　ぼたん雪だ」
すすけた窓わくのかなたに、たしかに大きな雪片が舞いはじめていた。室内のあかりをうけて、あとからあとから、現れては沈んでゆくのである。それは、どことなく人の心を明るくするような光景だった。典夫だけではなく、だれもかれもが、胸中にあかりがついたような顔をしていたのである。
「そう……雪ね」

大谷先生がつぶやいた。
「なんだか、ことしはいろいろと、いいことがありそうな気がするわ」
「この調子では、積もるかもしれませんよ」
広一の父がほがらかにいった。
「このぶんでは、うまくタクシーがつかまるかどうか……」
そして広一と母を見た。
「帰ろうか」
「うん」
広一は答えると、山沢一家に声をかけた。
「さよなら」
典夫のお父さんが会釈した。
「ほんとうにいろいろとありがとう」
「典夫さん、さようなら」
みどりもいった。典夫は整った顔をすこしやわらげると、こういったのだ。
「さよなら……。また、あした」

そう……広一はふと胸を打たれるものを感じた。そうだ〝またあした〟という言葉こそ、いまのみんなの気持ちではなかっただろうか。いまでは、山沢一家にはあしたというものがあるのだ。いや、山沢一家だけではない。ほかの次元放浪民の人たちや、大谷先生や香川みどりや、広一たちの上にも、同じように存在するのだ、と思った。

あした……それは、だれにでもあるのだ。そのことを知ってさらにすばらしいあしたを創るのは、ぼくたち自身でなければならないのだ。

最後の授業時間

当然のことながら、典夫たち次元放浪民をどうするかということについて、激しい論議が巻きおこった。

しかし、けっきょくのところ、すべての人々はかれらを日本国民として処遇することになったのだ。作られたものだとはいえ、戸籍も住民登録も、本物とまったく区別がつかないのだし、なんといっても人々の同情が集まって世論になったからである。

事態は明らかによい方向にむかっていた。

窓から流れこんでくる風は強かったが、しかし、そこにはたしかに、もうすぐそばまできた春の息吹（いぶき）がある。

すこし早めに授業をきりあげた大谷先生は、教科書をとじると、教卓に手をついて二年三組の一同を見渡した。

「これで、二年の理科の授業は全部おしまいです」

先生はいった。

「すぐに学年末試験が始まって、それから終業式というわけだけど……こんどは三年生よ。高校入試の勉強はしっかりやってね」

みんな、奇妙に静かだった。どことなくうらさびしい感じが教室にただよっている。みんな、過ぎ去った一年のことを考えているのだな……と広一は思った。広一自身にとっても、この一年間はなんとめまぐるしくいそがしかったことだろう。ことに、山沢典夫が出現してからの毎日は、過ぎてしまったいまになって考えると、まるで夢のような気がする。

しばらくだまっていた大谷先生は、そのとき思い出したようにみんなにいった。
「ところで、きょうは、みんなにお話ししなければならないことがあるのよ」
そして最前列の典夫をゆびさした。
「山沢くん、あなたから話したら……？」
広一はどきんとして、立ちあがった典夫のほうを見た。また何か起こったのだろうか？
「ぼくは、来学年から東京に住むことになりました」
と、典夫は話しはじめた。
「東京？　じゃ、転校するのかしら」
みどりがそっと広一にささやいた。クラスメートたちも同じ気持ちだったとみえて、つぶやくようなざわめきが教室に満ちた。そのざわめきが静まるのを待って、典夫は静かに、しかしはっきりというのだった。
「ごぞんじのように、ぼくたち次元放浪民は、この世界でそれぞれ仕事を見つけて全国に散ってゆきました。ぼくの父もじっくりと腰をすえて、この世界の役に立ちたいといっていたんですが……こんど、東京のほうに技師の仕事が見つかったんです」

ちょっと語尾がかすれたが、典夫はすぐにしっかりした声でつづけた。
「これは、きのうの晩、急に決まったことなんです。ぼくはこの学校をかわるのはいやだと思いました。けど、やがて別れ別れにならなければならないことははっきりしているのですから、ここで父といっしょに東京へ引っ越そうと思います。ぼくは……東京へ行ってもこのクラスのことは決して忘れません。大谷先生や、岩田くんや、香川さんや、みんなのことを思い出しながら、新しい学校で勉強をつづけるつもりです」
「山沢くんは、あとでみんなにいうつもりだったらしいけど……」
大谷先生が、典夫の言葉をひきとって説明した。
「先生はきょう、ここで発表しなさいといったのよ。だってこのクラスの全員が山沢くんの友だちなんだから、その義務があると思ったの。……そうじゃないかしら」
広一は、先生と典夫に交互に目を向けながら話を聞いていた。はじめのうち、典夫がいちばんさきに自分に話してくれてもよかったのじゃないかというような気がしていたのだが、いつか、これでいいんだという気持ちになっていた。
広一は横の香川みどりを見た。最近はすっかり、もとのみどりにもどっていたのだ

が、このことでまたショックを受けるのじゃないかと思ったからであった。

だが、みどりは広一に軽い微笑を返しただけであった。そこには、自分の気持ちというものを、自分自身で整理することのできた者だけに見られる、あの晴れやかさがあったのだ。

悩み苦しんでいたみどりは、きっと典夫の帰還を頂点として、そこで自分自身を取りもどしたのにちがいない。中学二年生のクラスメートとしての関係の限界というものを、彼女は自分にいい聞かせて、なんとかしてもとの自分にかえろうとしたにちがいない。もちろん広一の気のせいか、そうしたみどりの顔には、まだかすかにさびしそうな影はただよっていたものの、どうやらもうそれほど心配することはないように見えるのだった。

クラスの全員がそれぞれ自分の感慨をかみしめているとき、廊下のほうから授業の終わりを告げるベルの音が流れてきた。

いつもの習慣どおり、校門を出るときには、広一と典夫とみどりは、いつか肩を並べていた。

「あんなかたちで発表したこと、悪かったかもしれないな」

と、典夫はいった。

「でも、そのほうがなんとなくいいような気がしたんだ」

「わかってるわ」

みどりがさえぎった。

「いままでのあなたは、まるで堅い殻の中にはいっていたようだった。それが、このごろは進んでみんなといっしょにやっていこうとする……その表われだと思っているわ」

「そうか」

典夫はうなずいた。

「わかってくれたのか」

広一は何もいわなかった。いう必要がないように思えたのだ。かわりに、なにげなく話題を転じたのである。

「もうすぐ学年末試験だぞ」

「そうなんだ！」

典夫は快活に答えた。

「がんばろう!」
三人は、まるで申し合わせたように、校門を出たところで立ちどまった。振り返った校舎の早咲きのサクラは、もうちらほらと咲きはじめていた。

講談社文庫版あとがき

この『なぞの転校生』は、今から見れば随分前の、当時の学年別月刊学習誌に連載されたもので、私のジュブナイルＳＦの最初の作品である。連載開始にあたって編集者は、「こういう雑誌では、どんな大家（たいか）が書いたものであろうとも、面白くなければ読者はそっぽを向きますからね」と言った。ま、本当はどんな雑誌でもそうなのであろうが……。私としてはようやく知られはじめていたＳＦの感覚をどう伝えようかと努力した記憶がある。そんなわけで、以後、少しは改稿したところもあるが、全体としては、ＳＦとしての基本的物語とされても、当然と言わなければなるまい。
だが一方、今度また読み返すうちに、ここには現代だから逆に浮かび上がってきた考え方もあったのは、事実であり、それを一つ二つ記してみたい。

一つは、この舞台が学校と団地であり、学校はかつての学校らしく共同体として機能し、団地は各戸の結びつきは弱いながらも新しい生活様式としての共通意識みたいなものがあったけれども、現代はまるきり違ってきているらしい——ということだ。それもただ単にばらばらになっただけではなく、自分たちとは異なるものを（安全のために？）排除しながら、しかし同類が仲間としての結束を持つわけでもない、という様相を強めているのである。こうした人間どうしの関係は、これからどうなるのだろう。

もうひとつは、この話で私は、他の世界が次々と結局は核戦争になる中で、地球だけが無事で済むのだろうか（昔、手塚治虫さんが指摘して下さった）ということや、他の世界で迫害を受けてきた典夫たちを、私たちが仲間として受け入れるであろうか、との疑問に対して、何となくうまくいく、いや、いかなければならない、との感覚を、おしまいまで通してしまったが……。現在の私には、楽観的に過ぎたのではないか、これはむしろ願いであり祈りではないのか、と思えるのである。いや、そんなことを言っていてはいけないのであろうが、人間、年を取ると意地が悪くなるのだろうかと、自分でも肩をすくめたい気分なのだ。

でも、ま、それらはそれらとして、この作品は、書いていた私自身が若かったなあと、懐かしい気分にさせてくれるのである。

二〇一三年一〇月

眉村　卓

解説

愚かなサルになるよりは、素朴にサルのままでいい。

岩井俊二（映像作家）

とある縁で、深夜ドラマの企画を依頼された。まずはスタッフとのミーティングの中で、そういえば昔「なぞの転校生」というドラマがあってね、と僕がつい昔話をしてしまい、結局これを提案してみることになった。次にテレビ局のプロデューサーたちとのミーティングが行われ、プロデューサーのひとりが、昔「なぞの転校生」というドラマがありましてね、と言い出した。お互いに持ち込んだカードが「なぞの転校生」であったという、何とも不思議な偶然。ならこれで行きましょうと、企画会議はあっさり決着がついた。

「なぞの転校生」。

このドラマはかつてＮＨＫの少年ドラマシリーズという枠で一九七五年十一月十七

日〜十二月三日に放映された。少年ドラマシリーズとは、子供向けの朝ドラと言えば想像しやすいだろうか。学校が終わって家に帰る夕方の六時台にオンエアされ、珠玉の名作を数多く輩出した伝説のドラマシリーズである。中でもＳＦ作品は圧倒的に人気があった。僕の周りでも、純文学系はパスして、ＳＦ作品になると好んで観るという友人も多かった。その代表作「タイム・トラベラー」は少年ドラマシリーズのオープニング作品でもあった。原作は筒井康隆の『時をかける少女』である。その後何度も映画化もされ、アニメにもなった人気ＳＦジュブナイルだ。続編も作られた。時間旅行の能力を手に入れてしまった老人たちが、その力をもてあそんだ挙げ句、胎児となって時空の闇に消滅してゆくという恐ろしい回は今も鮮烈に記憶に残っている。その後も「夕ばえ作戦」「まぼろしのペンフレンド」「明日への追跡」「未来からの挑戦」「幕末未来人」「その町を消せ！」「七瀬ふたたび」とＳＦジュブナイルは少年ドラマシリーズには欠かせない位置を占め続けたが、とにかく圧倒的な人気だったのが「なぞの転校生」だった。

当時中学生だった僕が、今改めてこの物語を描く。その意味を日々ふり返らずにはいられなかった。

このドラマが放送された一九七五年当時の僕らは、まさにＳＦが描くような未来が本当に来ると信じていた。やがて、ジョージ・オーウェルの描いた一九八四年を通過し、アーサー・Ｃ・クラークの二〇〇一年も通過し、今僕らは二一世紀という時代にいる。予想通りコンピューターは世界を席巻している。ロボットはまだ展示会場を歩き回る程度である。反重力装置で走り回る空飛ぶ自動車はない。遺伝子技術はクローン人間を作りさえしなければ何でもよいと言わんばかりに多方面に発展している。火星に人類を送り込むという構想だけは持ち上がっているが、もう何十年も月の上を歩いている人の姿すら見ていない。

ＳＦの父と呼ばれたＨ・Ｇ・ウェルズは多くの未来予想をし、あるものは的中し、あるものはいまだに実現していない。タイムマシンや透明人間はいまだに人類が到達できていない技術だ。『解放された世界』では、核兵器もない時代に核戦争の恐怖を描いたが、それは広島と長崎で本当の出来事となったのみならず、その開発に関わったレオ・シラードはこの小説から核兵器のヒントを得たという。しかしＨ・Ｇ・ウェルズの描いた核兵器は我々の知るものとは次元が違う。彼の核兵器は一度爆発したら、ずっと爆発し続ける核兵器だった。剥き出しの原子炉、地球に現れた太陽のよう

なものである。Ｈ・Ｇ・ウェルズはこの自らの想像の産物に恐怖し、人類滅亡のシナリオを思い描いた。

そんな彼は晩年政治活動にのめり込んで行く中で、世界で初めて平和憲法を作成する。そしてこれをスターリンやルーズベルトに提案し、世界が国を超えてひとつになり、戦争を放棄しないと、やがては滅亡すると訴えた。こうした活動が原動力になり国際連盟が誕生し、やがて今の国際連合に発展していったという。しかしＨ・Ｇ・ウェルズの考えた平和憲法を採用した国は残念ながら日本だけだった。日本国憲法第九条の戦争放棄は、それをしなければ人類は滅ぶというＨ・Ｇ・ウェルズのメッセージとも読めるのである。

戦後七十年を迎える現代において、核戦争とはいささか古いイメージなのかも知れない。しかし核兵器は広島・長崎以降、戦争で使われていないだけで、なくなったわけでもなんでもない。いつか核兵器が使用され、ひとつの国が滅んだ時に、我々は意外に感じるだろうか？　現在も三万二千発もの核弾頭が存在するのである。戦後約半世紀の間に二千回以上の核実験が行われているのである。アメリカはいまや核廃絶に向けて積極的だが、片方で石を敵にぶつけるような原始的な兵器を開発しているとい

う話もある。ただこの石は投げ方が問題である。宇宙空間から隕石並みのスピードで落とすのである。その石の衝撃は核兵器に匹敵し、地下数百メートルまでも壊滅させるという。最近では「神の杖」と呼ばれている。宇宙条約で禁止された禁断の技術だ。

最近のニュースにこんなものまであった。最初の民間用火星旅行ツアーをとある企業が企画したら、一万を超す応募があったという。このツアーは片道切符で帰って来れないシロモノなのにもかかわらず、である。

果たして人類とは一体何がしたい生き物なのかと思う。

３・11以降、放射能と共存しなければならない時代を生きながら、僕らは本当にバカなサルだとつくづく思う。Ｈ・Ｇ・ウェルズや多くの先人たちの警告をことごとく軽視して、有り難くない世界を自ら築き上げてしまった。そしてこれからも、この愚行は続いてゆくのだろう。こうした科学技術を多くの人たちが、自分たちが作り上げたものだと誤解している。僕はそこだけは異議を唱えたい。多くの人間はサルとたいしてかわらない素朴な生き物であって、一部のマッドサイエンティストたちの愚行にただ振り回されているだけなのだとは言えないだろうか。仮にあなたが宇宙人に捕ら

えられて、火星に連れてゆかれ、そこにビルを建ててみよと命令されても、図面ひとつ描けないだろう。スマホを作れと言われても、手も足も出ないだろう。そんな素朴なサルが自分たちなのだと思うし、それでいいのだとも思うし、そんな素朴さを大事にしないと、本当に目も当てられない未来が待ち受けている気がしてならない。

愚かなサルになるよりは、素朴にサルのままでいい。

「なぞの転校生」を脚本にしたための一ヵ月間は、こんなことばかり考えたひと月でもあった。

|著者| 眉村 卓　1934年大阪市生まれ。大阪大学経済学部卒業後、耐火煉瓦会社勤務の傍らSF同人誌『宇宙塵』に参加。1961年、「下級アイデアマン」が『SFマガジン』のコンテストに佳作入選し、コピーライターを経て1965年より専業作家となる。1979年『消滅の光輪』で第7回泉鏡花文学賞と第10回星雲賞を受賞。1987年『夕焼けの回転木馬』で第7回日本文芸大賞受賞。1996年『引き潮のとき』で第27回星雲賞受賞。『ねらわれた学園』『なぞの転校生』など、1970年代に発表されたジュブナイルSFは10代の読者を中心に絶大な人気を博し、何度も映像化されてきた。近著に『僕と妻の1778話』『沈みゆく人』『しょーもない、コキ』など。2012年6月より、出版芸術社から「眉村卓コレクション」の刊行が開始された。

なぞの転校生（てんこうせい）

眉村（まゆむら） 卓（たく）

2013年12月13日第1刷発行

発行者――鈴木　哲
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　　販売部（03）5395-5817
　　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに表示してあります

デザイン―菊地信義
本文データ制作―講談社デジタル製作部
印刷―――豊国印刷株式会社
製本―――株式会社国宝社

ISBN978-4-06-277754-4

本書は、二〇〇四年二月に小社の青い鳥文庫から刊行されました。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

本格ミステリ作家クラブ編　大きな棺の小さな鍵〈本格短編ベスト・セレクション〉
本格ミステリ作家クラブ編　珍しい物語のつくり方〈本格短編ベスト・セレクション〉
本格ミステリ作家クラブ編　法廷ジャックの心理学〈本格短編ベスト・セレクション〉
本格ミステリ作家クラブ編　見えない殺人カード〈本格短編ベスト・セレクション〉
本格ミステリ作家クラブ編　空飛ぶモルグ街の研究〈本格短編ベスト・セレクション〉
星野智幸　毒　身
星野智幸　われら猫の子
本田靖春　我、拗ね者として生涯を閉ず(上)(下)
本田透　電　波　男
本城英明　警察庁広域特捜官　梶山俊介〈広島・尾道「刑事殺し」〉
堀田純司　スゴい雑誌〈「業界誌」の底知れない魅力〉
本多孝好　チェーン・ポイズン
穂村弘　整　形　前　夜
堀川アサコ　幻　想　郵　便　局
堀川アサコ　幻　想　映　画　館
松本清張　草　の　陰　刻
松本清張　黄　色　い　風　土
松本清張　黒　い　樹　海
松本清張　連　環

松本清張　花　氷
松本清張　遠くからの声
松本清張　ガ ラ ス の 城
松本清張　殺人行おくのほそ道(上)(下)
松本清張　塗 ら れ た 本
松本清張　熱　い　絹(上)(下)
松本清張　邪馬台国　清張通史①
松本清張　空白の世紀　清張通史②
松本清張　カミと青銅の迷路　清張通史③
松本清張　天皇と豪族　清張通史④
松本清張　壬申の乱　清張通史⑤
松本清張　古代の終焉　清張通史⑥
松本清張　新装版大奥婦女記
松本清張　新装版増上寺刃傷
松本清張　新装版　彩色江戸切絵図
松本清張　新装版　紅刷り江戸噂
松本清張他　日本史七つの謎
松谷みよ子　ちいさいモモちゃん
松谷みよ子　モモちゃんとアカネちゃん

松谷みよ子　アカネちゃんの涙の海
眉村卓　ねらわれた学園
眉村卓　なぞの転校生
丸谷才一　恋と女の日本文学
丸谷才一　闊歩する漱石
丸谷才一　輝く日の宮
丸谷才一　人間的なアルファベット
麻耶雄嵩　翼ある闇〈メルカトル鮎最後の事件〉
麻耶雄嵩　夏と冬の奏鳴曲
麻耶雄嵩　木製の王子
松浪和夫　摘　出
松浪和夫　非　常　線
松浪和夫　核　の　柩
松浪和夫　警官魂〈激震篇〉〈反撃篇〉
松井今朝子　仲蔵狂乱
松井今朝子　奴の小万と呼ばれた女
松井今朝子　似せ者
松井今朝子　そろそろ旅に
松井今朝子　星と輝き花と咲き

町田康　へらへらぼっちゃん
町田康　つるつるの壺
町田康　耳そぎ饅頭
町田康　権現の踊り子
町田康　浄　土
町田康　猫にかまけて
町田康　真実真正日記
町田康　宿屋めぐり
町田康　猫のあしあと
舞城王太郎　煙か土か食い物〈Smoke, Soil or Sacrifices〉
舞城王太郎　世界は密室でできている。〈THE WORLD IS MADE OUT OF CLOSED ROOMS〉
舞城王太郎　熊の場所
舞城王太郎　九十九十九
舞城王太郎　山ん中の獅見朋成雄
舞城王太郎　好き好き大好き超愛してる。
舞城王太郎　NECK
舞城王太郎　SPEEDBOY!
舞城王太郎　獣の樹
松尾由美　ピピネラ

松久淳・田中渉・絵　四月ばーか
松浦寿輝　花　腐　し
松浦寿輝　あやめ 鰈 ひかがみ
真山仁　虚像の砦
真山仁　レッドゾーン(上)(下)
真山仁　新装版　ハゲタカ(上)(下)
真山仁　新装版　ハゲタカII(上)(下)
毎日新聞科学環境部　理　系　白　書
毎日新聞科学環境部　「理系」という生き方〈この国を静かに支える人たち〉〈理系白書2〉
毎日新聞科学環境部　迫るアジア　どうする日本の研究者〈理系白書3〉
前川麻子　すきもの
町田忍　昭和なつかし図鑑
松井雪子　チ ル ☆
牧秀彦　裂帛〈五坪道場一手指南〉
牧秀彦　凛々〈五坪道場一手指南〉
牧秀彦　雄飛〈五坪道場一手指南〉
牧秀彦　清冽〈五坪道場一手指南〉
牧秀彦　美剣〈五坪道場一手指南〉
牧秀彦　無我〈五坪道場一手指南〉

真梨幸子　孤　虫　症
真梨幸子　深く深く、砂に埋めて
真梨幸子　女ともだち
真梨幸子　クロク、ヌレ！
まきの・えり　ラブファイト〈聖母少女〉(上)(下)
牧野修　黒娘　アウトサイダー・フィメール
毎日新聞夕刊編集部　女はトイレで何をしているのか？〈現代ニッポン人の生態学〉
前田司郎　愛でもない青春でもない旅立たない
間庭典子　走れば人生見えてくる
松本裕士　兄弟〈追憶のhide〉
枡野浩一　結　婚　失　格
円居挽　丸太町ルヴォワール
円居挽　烏丸ルヴォワール
松宮宏　秘剣こいわらい
松宮宏　くすぶり亦蔵〈秘剣こいわらい〉
丸山天寿　琅邪の鬼
三好徹　政・財　腐蝕の100年
三好徹　政・財　腐蝕の100年　大正編
三浦哲郎　曠　野　の　妻

三浦綾子　ひつじが丘
三浦綾子　岩に立つ
三浦綾子　青い棘
三浦綾子　イエス・キリストの生涯
三浦綾子　あのポプラの上が空
三浦綾子　小さな一歩から
三浦綾子　増補決定版 言葉の花束〈愛といのちの792章〉
三浦綾子　愛することと信ずること
三浦光世 三浦綾子　愛に遠くあれど〈夫と妻の対話〉
三浦明博　死水
三浦明博　サーカス市場
三浦明博　感染広告
宮尾登美子　東福門院和子の涙
宮尾登美子　新装版天璋院篤姫(上)(下)
宮尾登美子　新装版 一絃の琴
皆川博子　冬の旅人(上)(下)
宮崎康平　新装版 まぼろしの邪馬台国 第1部・第2部
宮本輝　朝の歓び(上)(下)
宮本輝　ひとたびはポプラに臥す 1〜6

宮本輝　骸骨ビルの庭(上)(下)
宮本輝　新装版 二十歳の火影
宮本輝　新装版 命の器
宮本輝　新装版 避暑地の猫
宮本輝　新装版 ここに地終わり 海始まる(上)(下)
宮本輝　新装版 花の降る午後(上)(下)
宮本輝　新装版 オレンジの壺(上)(下)
宮本輝　にぎやかな天地(上)(下)
峰隆一郎　寝台特急「さくら」死者の罠
宮城谷昌光　俠骨記
宮城谷昌光　夏姫春秋(上)(下)
宮城谷昌光　花の歳月
宮城谷昌光　重耳(全三冊)
宮城谷昌光　春秋の色
宮城谷昌光　介子推
宮城谷昌光　孟嘗君 全五冊
宮城谷昌光　春秋の名君
宮城谷昌光　子産(上)(下)
宮城谷昌光他　異色中国短篇傑作大全

宮城谷昌光　湖底の城一〈呉越春秋〉
宮城谷昌光　湖底の城二〈呉越春秋〉
水木しげる　コミック昭和史1〈関東大震災～満州事変〉
水木しげる　コミック昭和史2〈満州事変～日中全面戦争〉
水木しげる　コミック昭和史3〈日中全面戦争～太平洋戦争開始〉
水木しげる　コミック昭和史4〈太平洋戦争前半〉
水木しげる　コミック昭和史5〈太平洋戦争後半〉
水木しげる　コミック昭和史6〈終戦から朝鮮戦争〉
水木しげる　コミック昭和史7〈講和から復興〉
水木しげる　コミック昭和史8〈高度成長以降〉
水木しげる　総員玉砕せよ!
水木しげる　敗走記
水木しげる　白い旗
水木しげる　姑娘
宮脇俊三　古代史紀行
宮脇俊三　平安鎌倉史紀行
宮脇俊三　室町戦国史紀行
宮脇俊三　徳川家康歴史紀行5000キロ
宮部みゆき　ステップファザー・ステップ

講談社文庫　目録

宮部みゆき　震える岩〈霊験お初捕物控〉
宮部みゆき　天狗風〈霊験お初捕物控(二)〉
宮部みゆき　ICO―霧の城―(上)(下)
宮部みゆき　ぼんくら(上)(下)
宮部みゆき　新装版 日暮らし(上)(下)
宮部みゆき　おまえさん(上)(下)
宮部みゆき　小暮写眞館(上)(下)
宮子あずさ　看護婦が見つめた人間が死ぬということ
宮子あずさ　看護婦が見つめた人間が病むということ
宮子あずさ　ナースコール
宮本昌孝　夕立太平記
宮本昌孝　影十手活殺帖
宮本昌孝　おねだり女房〈影十手活殺帖〉
皆川ゆか　機動戦士ガンダム外伝〈THE BLUE DESTINY〉
皆川ゆか　新機動戦記ガンダムW(ウイング)外伝 ～右手に鎌を左手に君を～
皆川ゆか　評伝シャア・アズナブル〈《赤い彗星》の軌跡〉
三浦明博　滅びのモノクローム
三好春樹　なぜ、男は老いに弱いのか?
見延典子　家を建てるなら

道又力　開封 高橋克彦
三津田信三　忌館〈ホラー作家の棲む家〉
三津田信三　作者不詳〈ミステリ作家の読む本〉(上)(下)
三津田信三　蛇棺葬
三津田信三　百蛇堂〈怪談作家の語る話〉
三津田信三　厭魅の如き憑くもの
三津田信三　凶鳥の如き忌むもの
三津田信三　首無の如き祟るもの
三津田信三　山魔の如き嗤うもの
三津田信三　水魑の如き沈むもの
三津田信三　密室の如き籠るもの
三津田信三　スラッシャー 廃園の殺人
宮下英樹と「センゴク」取材班　センゴク合戦読本
宮下英樹と「センゴク」取材班　センゴク武将列伝
三輪太郎　あなたの正しさと、ぼくのセツナさ
三輪太郎　死という鏡〈この30年の日本文芸を読む〉
汀こるもの　パラダイス・クローズド〈THANATOS〉
汀こるもの　まごころを、君に〈THANATOS〉
汀こるもの　フォークの先、希望の後〈THANATOS〉

宮田珠己　ふしぎ盆栽ホンノンボ
道尾秀介　カラスの親指〈by rule of CROW's thumb〉
村上龍　海の向こうで戦争が始まる
村上龍　アメリカン★ドリーム
村上龍　ポップアートのある部屋
村上龍　走れ!タカハシ
村上龍　愛と幻想のファシズム(上)(下)
村上龍　村上龍全エッセイ〈1976～1981〉
村上龍　村上龍全エッセイ〈1982～1986〉
村上龍　村上龍全エッセイ〈1987～1991〉
村上龍　超電導ナイトクラブ
村上龍　イビサ
村上龍　長崎オランダ村
村上龍　フィジーの小人
村上龍　368Y Par4 第2打
村上龍　音楽の海岸
村上龍　村上龍料理小説集
村上龍　村上龍映画小説集
村上龍　ストレンジ・デイズ

講談社文庫　目録

- 村上　龍　共生虫
- 村上　龍　新装版 限りなく透明に近いブルー
- 村上　龍　新装版 コインロッカー・ベイビーズ
- 村上　龍　歌うクジラ(上)(下)
- 村上　龍／坂本龍一　EV. Café──超進化論
- 向田邦子　眠る盃
- 向田邦子　夜中の薔薇
- 村上春樹　風の歌を聴け
- 村上春樹　1973年のピンボール
- 村上春樹　羊をめぐる冒険(上)(下)
- 村上春樹　カンガルー日和
- 村上春樹　回転木馬のデッド・ヒート
- 村上春樹　ノルウェイの森(上)(下)
- 村上春樹　ダンス・ダンス・ダンス(上)(下)
- 村上春樹　遠い太鼓
- 村上春樹　国境の南、太陽の西
- 村上春樹　やがて哀しき外国語
- 村上春樹　アンダーグラウンド
- 村上春樹　スプートニクの恋人
- 村上春樹　アフターダーク
- 村上春樹／佐々木マキ絵　羊男のクリスマス
- 村上春樹／佐々木マキ絵　ふしぎな図書館
- 村上春樹／糸井重里　夢で会いましょう
- 村上春樹・文／安西水丸・絵　ふわふわ
- U・K・ル＝グウィン／村上春樹訳　空飛び猫
- U・K・ル＝グウィン／村上春樹訳　帰ってきた空飛び猫
- U・K・ル＝グウィン／村上春樹訳　素晴らしいアレキサンダーと、空飛び猫たち
- U・K・ル＝グウィン／村上春樹訳　空を駆けるジェーン
- T・ファリッシュ著／B・ルート絵／村上春樹訳　ポテト・スープが大好きな猫
- 群ようこ　濃い人々〈いとしの作中人物たち〉
- 群ようこ　いいわけ劇場
- 群ようこ　浮世道場
- 群ようこ　馬琴の嫁
- 室井佑月　Piss
- 室井佑月　子作り爆裂伝
- 室井佑月　ママの神様
- 室井佑月／丸山あかね　プチ美人の悲劇
- 村山由佳　すべての雲は銀の…(上)(下)
- 村山由佳　永遠。
- 室井　滋　ふぐママ
- 室井　滋　心ひだひだ
- 室井　滋　うまうまノート
- 室井　滋　気になり飯〈うまうまノート②〉
- 村野　薫　死刑はこうして執行される
- 睦月影郎　義姉〈武芸者 冴木澄香〉
- 睦月影郎　有情〈武芸者 冴木澄香〉
- 睦月影郎　忍萌
- 睦月影郎　変萌
- 睦月影郎　卍萌
- 睦月影郎　甘蜜三昧
- 睦月影郎　平成好色一代男 独身娘の部屋
- 睦月影郎　平成好色一代男 清純コンパニオンの好奇心
- 睦月影郎　平成好色一代男 和装セレブ妻の香り
- 睦月影郎　新・平成好色一代男 秘伝の書
- 睦月影郎　新・平成好色一代男 元部下のOL
- 睦月影郎　新・平成好色一代男 隣人と。女子アナと。
- 睦月影郎　武家娘〈明暦江戸隠密控〉

2013年12月15日現在